

ひろがる、新宿的ライフスタイル

- 1 若者が集う活気溢れる新宿づくり
- 2 ワーク・ライフ・バランス(働き方の見直し)の推進
- 3 ぶらりと道草したくなる楽しいまち
- 4 誰もがわくわくする末端と先端のあるまち
- 5 日本を代表する魅力ある超高層ビル群の再生
- 6 車中心から人間中心へ
- 7 ひとにやさしいのりものネットワーク
- 8 知のネットワーク

ひろがる、新宿的ライフスタイル

ロサス(Lifestyles Of Shinjuku And Sustainability)

ロハスは米国で提唱され、Lifestyles Of Health And Sustainability の頭文字をつないだ言葉で、「健康や持続可能性を重視するライフスタイル」を意味しています。そして、21世紀の我々の社会生活にも大きな影響を及ぼしています。ここでの柱となる精神は、今ある環境・状態の中で、それを慈しみ、楽しみ、将来へつなげていこうとするものです。この手法を活用し、新宿区の中でのあるべきライフスタイルを考えると、様々な方向性がうかがえます。そこで、ロサス(新宿的ロハス:Lifestyles Of Shinjuku And Sustainability)としての可能性を探りたいと思います。

まず、ロサスの特徴としては、大都会としての一面や、各地域との人々の暮らしとしての特性など、幅広い特徴が見られます。多くの来街者を招き入れ、多くの才能を輩出し、高等教育機関も数多く保持しています。まさに、人々が交差する辻(つじ)であり、人々が参画するまちであり、そこには多くの人たちの働く場として、教育の場として、集いの場として多くの顔を持っています。人が集まり、人が散じながら、数多くの文化活動の財産を残し、なおかつ、最先端の産業を育てています。また、時間的な軸から、新宿を考察しても、江戸時代の内藤新宿の頃から江戸の町の一角を担い、東京都庁を抱える一大都市に発展してきた重く、深い歴史もある地域であります。古くから今日まで、文化、経済、政治の中心のかつ第一線である「まち」は、世界的に見ても多くはないでしょう。

そして、これからも、人々の交差点でありながら、広く、深く、人々の営みを多岐に渡り支えていくためにも、新宿区民として「楽しもう新宿」という精神が大切だと思われれます。この独特な地域の特徴を生かした住人の意識を生かし、他から来た人たちを受け入れ、更なる発展の土台とする責任があります。これからも持続して行き、100年を経ても、最前線である「まち」を可能としていくためにも、区民として継続して取り組む活動や、新たに再構築してチャレンジしなくてはならない活動などがあります。そこで、我々は新宿的なライフスタイルを再構築し、21世紀を羽ばたき、人々の交差する場所であり、さらに活動や、他の才能や文化を吸収しつづける持続的創造都市として、新宿的ライフスタイルの広がりをみせることが、ますます重要となることでしょう。

1 若者が集う活気溢れる新宿づくり

【将来のあるべき姿】

新宿区は、早稲田大学を始め、多くの有名大学や専門学校が点在し、全国各地から若者たちが夢を抱えてやってくる地域です。彼らの活気が、また新宿区の活気にもつながっています。それらをさらにじょうずに融合し、世代間交流を広げ、またそれを都会と地方との地域交流につなげていくことが、次の新宿の可能性を引き出すのではないのでしょうか。わたしたちは、彼らの若さ、力に期待しています。彼らとともに、新宿の未来を語り、彼らの考えにも耳を傾け、ともに行動したいと思います。

また、新宿は、地方の若者たちが観光で訪れるまちでもあります。彼らの期待を裏切らない、夢のあるまちであり続けたいと思います。

新宿区民の資産として、より区民にとっても訪問者にとっても快適で対外発信力のあるまちとするために、若者が集う活気溢れる新宿づくりに若者自身のアイデアや活力が活かされるしくみづくりが必要です。

【現状と課題】

新宿には様々な顔がありますが、特に全国的に知名度が高く、各地の若者が集うのが新宿駅周辺です。とはいえ、区民として本当に自慢ができるエリアとなっていないのが現状です。たばこのポイ捨てや不法看板などの美化に関する問題、歌舞伎町エリアで特に問題となる防犯・治安問題、不法駐車や駐輪などの交通問題、営業する側、訪れる側のマナーや、付加価値の向上など様々な問題が存在しています。

また、そうした課題に対して、多くの人が無関心であるという実態があります。それは、彼らが「お客さん」や「消費者」として扱われているだけであるからではないのでしょうか。

【取り組みの方向性】

1. 地域商店や企業と連携した若者によるイベント企画

若者を対象とした商店が多い新宿の中で、販売顧客だけとしてではなく、商品企画やイベント企画に参加協力する機会を提供することが必要です。そのことにより、商店側は商店アピールと市場調査ができ、若者側としては新たなチャレンジの機会や自己表現の場が得られます。区としては、それらを発信することにより、若者がチャレンジできる活気溢れるまちとしてイメージを打ち立て、人の循環量を増やすキッカケとなります。区と企業との連携には、一線が必要ですが、特定の企業の販売促進が目的とならなければ、問題はないのではないのでしょうか。

2. 若者発のアイデアを産む場の確保・バックアップ

現在、高校生以上の青少年の居場所は限られており、そのせいか、コンビニエンスストアの前や通路階段などで座り込んでいる場面をよく目にします。そうした彼らの拠点が、新宿駅近辺にできたり、各大学構内に設けることができれば、新宿の活気をPRする効果にもつながり、大いに活かされるのではないのでしょうか。こうした施設の企画・維持管理には、青少年自身が携わり、大人の区民や行政は後方支援に徹します。また、青少年自立のための「ジュニア市民会議」(仮称)等とも連携し、公共性や市民参画・市民自治などこれまであまり学ぶ機会がなかった新しい分野の教育的効果も期待し、青少年の潜在的に持つが、これまであまり引き出しきれていなかったさまざまな能力を引き出す機会にします。

3. 安心して若者が集えるまちづくりのために

現在の歌舞伎町の問題は法制に根本原因があります。1956年売春防止法が成立し、国家が売春業者を公認する制度は廃止されました。しかし風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律に基づいた性風俗関連特殊営業が行われています。歌舞伎町では、日本女性のみならず、来日外国人女性の人身売買被害者が働かされ、人権を無視した生活を強いられているケースも多くあるということです。性売買が行われれば、若者の人権意識が育たず、世界にむけても恥ずかしい現状をひきずることになるでしょう。

新宿区民として安心して若者が集えるまちをつくるため、性風俗関連特殊営業について協議の場をもつことを提案します。

(第1分科会)

2 ワーク・ライフ・バランス(働き方の見直し)の推進

【将来のあるべき姿】

子育て・子育てに欠かせない“家庭”という環境は、個人だけでは解決できないその国の経済や社会情勢、風土なども密接に関係しています。そのため、次世代を担う子どもの子育て・子育ての環境について考えるとき、これらの社会的環境の議論は欠かすことができません。日本では、戦後、高度成長期、バブル崩壊など時代の変化とともに、「大家族から核家族や単身世帯の増加」といった家族のあり方や家族の役割が変わり、「年功序列の終身雇用から能力主義の契約社員やパートタイム、アルバイトといった多様な雇用形態へ」と変化してきています。一方で、男女雇用機会均等法や育児休業・介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律が施行され、次世代育成支援対策推進法に基づく「一般事業主行動計画」の策定が求められるなど、制度として根付くにはもう少し時間がかかりそうですが、働きやすい環境は整いつつあります。人々のライフスタイルが変化・多様化していく中で、一人ひとりが仕事、家庭、子育てなど様々な分野で『自分らしい生き方を選べる』社会になることが理想です。ワーク・ライフ・バランスとは、子育てのみならず、年齢、性別、子どもの有無の関係なくすべての人が望む仕事と私生活バランスが取れることを言い、これからの個人や企業において重要な考え方です。

ここで、子育てに関してもう少し付け加えれば、子育て世代の意欲を生かしそれぞれのライフスタイルを実現するには、社会で子育てを支え、様々な負担感を取り除いていくことが大切です。仕事中心の働き方を見直し、男女がともに仕事と家庭を両立できるよう就労環境を改善していくとともに、地域における子育て支援を広めていくことが重要です。これらは、社会保障や労働環境の改善など、大きくは国の政策ではありますが、大企業から中小企業までが多く集まり、日本の経済の中心地のひとつである新宿区が小さな波紋を投げかけることは、大変意義のあることではないでしょうか。誰もが「夢の持てる社会」になるように、常に最先端の発信をしていく新宿区であって欲しいと思います。

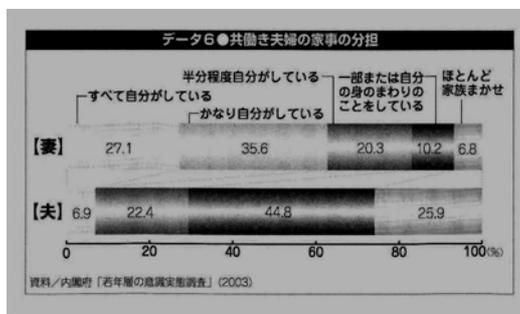
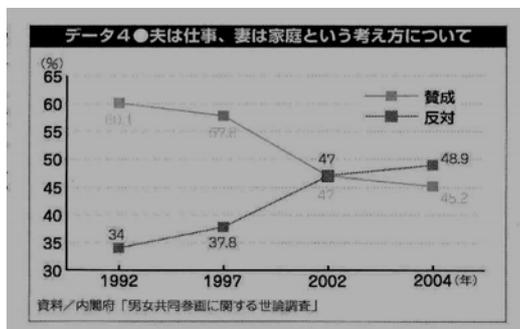
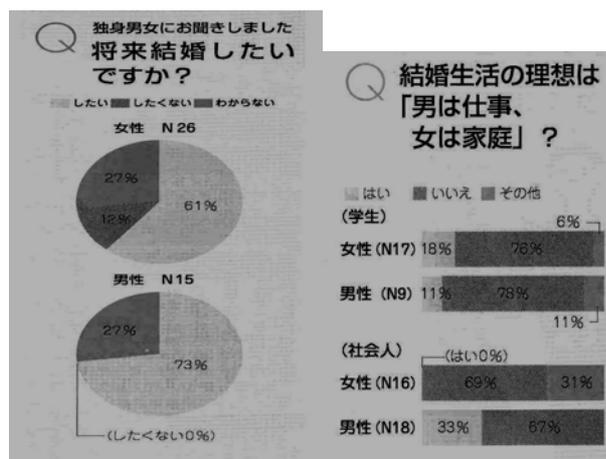
そして、私達区民も、企業にどんなことを求めていきたいか、今後さらに議論し、行政とともに何らかの働きかけをしていく必要があるでしょう。

こういった試みが、企業の経営者や従業員にとっても、新宿が魅力ある働きやすいまちになり、愛着を持ってもらえるような結果になることが理想です。

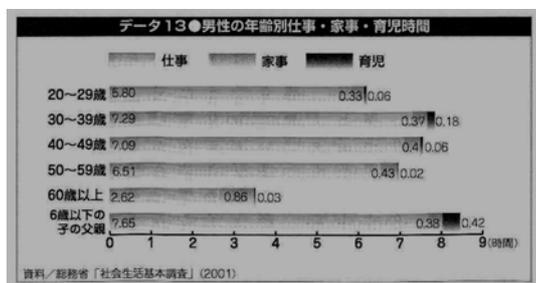
【現状と課題】

少子化といわれますが、子どもを産む以前に若者の未婚化・晩婚化が進んでいることが統計でも明らかになっています。一方で、調査によると若者の多くは結婚する意志が

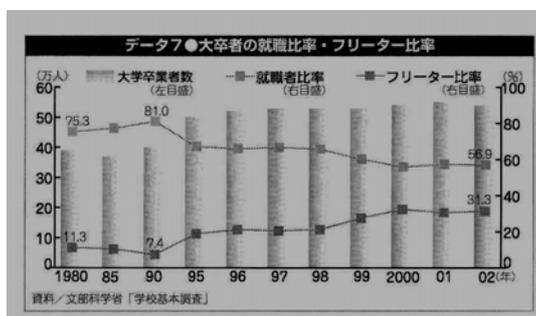
ないわけではないという結果も出ています。



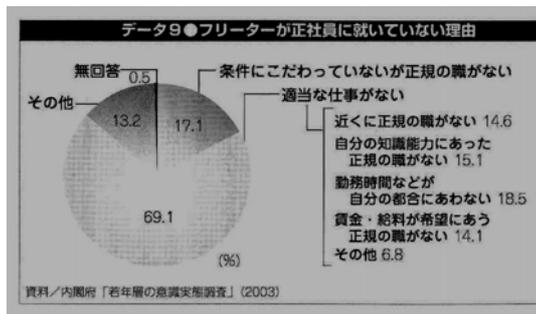
(区総務部男女共同参画・平和担当が発行している「フォーラム」Vol.24 より)



現在、「仕事と子育ての両立」と「子育ての負担感の解消」をするための子育て支援サービスは少しずつ充実してきましたが、家庭における女性の家事負担も非常に大きく、働き続けたい女性にとって結婚をためらう理由のひとつになっていることがわかりました。一方、子育て期にある30代男性の4人に1人は週60時間以上就業しており、家事や育児に費やす時間は世界的に見ても最低の基準です。「男性は外で働き、妻は家庭を守る」という価値観から性別役割分業意識は変化し、「家庭責任をともに担いながら男女が平等に働き続ける」ことを望んでいる人が増えているのに、社会の制度や風土が追いついていない現状がうかがえます。



また、希望する仕事や条件にあう仕事がないなど就労環境の悪化や、企業側にとっても学生の資質の低下や意識の変化などが影響し、若者の就職率は減り、新卒のフリーターが増えています。若者の働くことに対する考え方も変わりつつありますが、フリーターは働き方が選べる一方、賃金が低く、技能を身につける機会が少ないのが現状であり、将来に対する不安から、

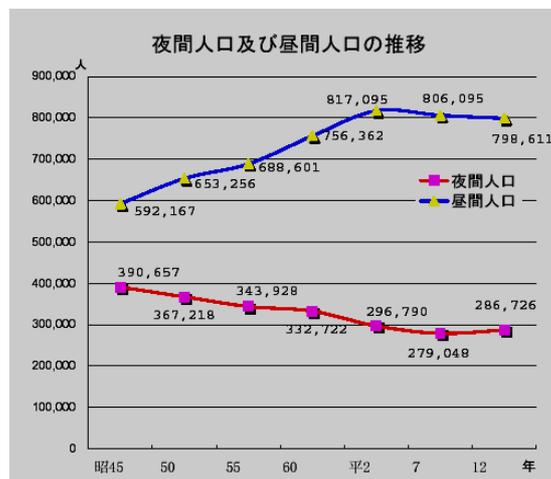


いずれ正社員として働きたいと考えるようになるフリーターも少なくないようです。子育てに対する経済的な負担感に加え、生活の基盤が安定しない状態では、子どもを産み育てたくても出来ない人が少なくないであろうと考えます。また、仕事を継続したいと希望しながらも子育てのために退職せざるを得ない女性が多い現状もデータで明らかになっています。

こういったデータから、仕事と家庭、子育て、自分自身の生き方、どれも頑張りたい人がどれかを選ばなくてはいけないのが現状です。こういった働き方についての施策は、社会保障制度をはじめ国レベルで取り組むべき施策ではありますが、すべての人に浸透していくには、身近な地域や自治体の取り組みも必要ではないでしょうか。

新宿区は、企業や学校が多く、区外から多くの人が通勤・通学してくる昼間人口と区内在住者を表す夜間人口の差が大きく、企業への取り組みは、結果的に区外の人への施策となってしまうために、行政は積極的に企業への働きかけを行ってきませんでした。

企業側も、新宿区に本社や事業所があっても、新宿区の施策には興味を示さなかったことが区民会議を通じた議論の中で明らかになりました。また、企業と一口に言っても従業員の少ない所から、全国や世界に支社のある大企業まで様々で、行政として一律に働きかけていくのはとても難しいことも判っています。



行政資料 新宿区の概要 平成17年度 より

1 産業大分類・従業者規模別事業所数及び従業者数 (平成13年10月1日現在)

規模別 産業大分類	事業所数									派遣・ 下請け のみ	従業者数 人
	総数	1~4人	5~9人	10~29人	30~49人	50~99人	100~299人	300人以上	派遣・ 下請け のみ		
総数	37,260	18,451	8,521	6,787	1,532	1,039	618	218	94	604,490	

果たして、新宿区という自治体の単位でこのような問題に取り組むことに効果があるのだろうかという議論はまだ充分尽くされていません。多くの企業が集り、日本の経済の代表的な中心地のひとつであるという、新宿区の特徴をいかしていくのであれば、まずはこれらの企業に少しずつでも行政として様々なヒヤリングや働きかけをしていくことは必要なのではないのでしょうか。

そして、その取り組みを見守り評価する区民の意識も大切です。例えば、行政が働きながら子育てしやすい環境の整備として延長保育や休日保育などの保育サービスを拡充していくと、一方で企業はますます長期間労働を

させ易くなる側面を持っています。新しい制度やサービスを作るときはメリットだけでなく必ずその裏側にあるデメリットも検討していくことが必要です。

【取り組みの方向性】

1. 『新宿区はワーク・ライフ・バランスを推進する企業を応援します(育てます)』というスローガンを掲げ、企業に働きかける。

従業員数が301人以上の企業は次世代育成支援対策推進法に基づく「一般事業主行動計画」の策定が義務付けられており、新宿区内の企業も提出しています。

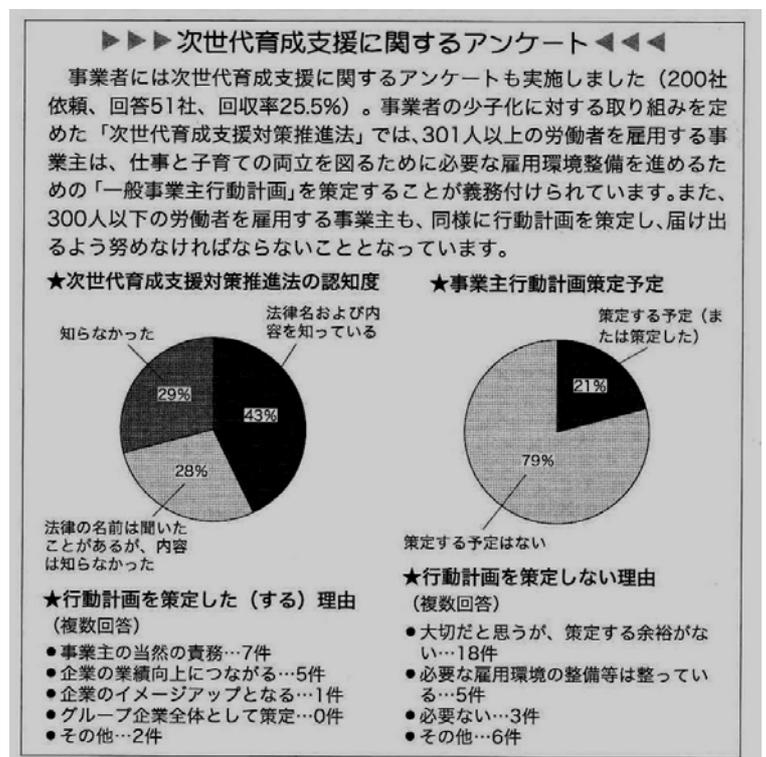
しかし、新宿区が行ったアンケートでも区内の企業は、まだこの法律の認知度が低く、企業の責任としての自覚もないところが多く、区としてもっと企業へ働きかけが必要です。

まずは、この行動計画がどの程度達成されているか検証する必要があります。

また、従業員数が300人以下でも独自の行動計画を作るよう推奨すべきです。

そのためには、ワーク・ライフ・バランスに取り組めない企業の事情を調査し、行政がやるべき支援を検討する必要があります。

また、ワーク・ライフ・バランスを取組める企業の意識付けのために、新宿区独自の目標値を設定することを提案します。



新宿区報 平成18年5月15日号 より抜粋

2. 企業と地域や区民をつなげる橋渡し役や交流の場づくりを検討していく

例えば、「家族でご飯を食べる日」など、企業と区民が一緒に取り組める新宿区独自の意識啓発キャンペーンを実施することを提案します。

行政は、先駆的な企業の具体的なワーク・ライフ・バランス推進や地域貢献の事例を紹介し、提案していきます。(例えば、看護休暇の促進。外国人や障がいのある人の雇用促進。個人のボランティア・地域活動のための休暇の促進。など)

防災、防犯、タバコポイ捨てなど地域の課題解決に企業で働く人や雇用者の視点も取り入れるために地区協議会に参加してもらったり、社会貢献の一環で児童や

青少年の職業体験やその他のイベントなどにも協力してもらったり、企業の空きスペースを地域で利用できないか呼びかけるなど、地域に密着した企業との橋渡し役になる人材またはネットワークづくりの検討をします。

3. ワーク・ライフ・バランス企業に対する新宿区独自の優遇措置

上記 2 項目で延べたようなワーク・ライフ・バランス推進や地域貢献に取り組む目標値を設置し、達成した企業の表彰及び周知を行います。

目標値を達成した企業に対する新宿区独自の優遇措置を検討。

例： 優良企業の区外在住の社員には現状区内在住者のほうが優先されている区立保育園の入園ポイントを加算します。

優良企業が優先的に利用できる産休・育児休暇を取得した場合の補填人員経費の助成金制度を作ります。 etc.

4. ワーク・ライフ・バランス企業を推進するための区民の組織づくり

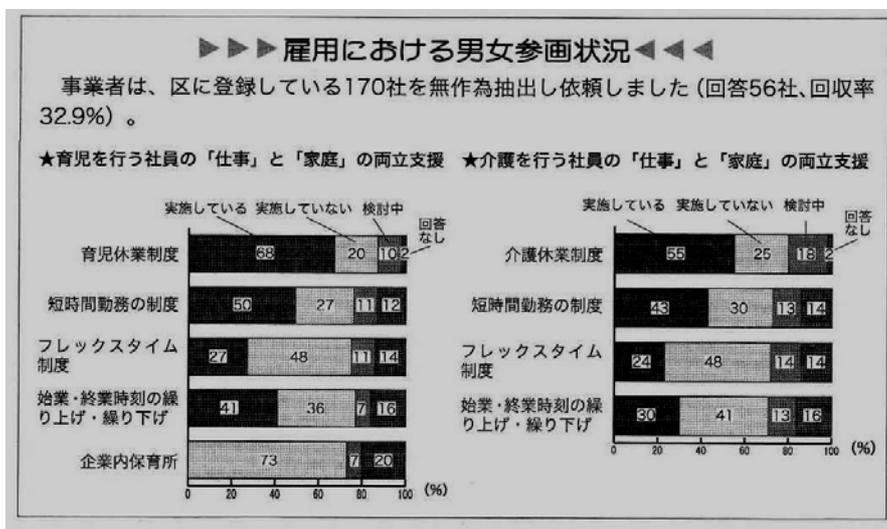
最初に述べた次世代育成支援対策推進法に基づく「一般事業主行動計画」の達成度の検証は、行政だけでなく区民も一緒に見守る必要があります。現在、次世代育成支援計画推進会議では、行政や民間の子育て支援に対する取り組みに重点が置かれて

いますが、企業の行動計画についても見守る必要があります。企業のワーク・ライフ・バランスや地域貢献の課題解決は行政や区民も一緒に検討するような場の検討が必要であると考

えます。ワーク・ライフ・バランスに限らず、環境や地域課題解決の面でも区民の要望を受け入れてもらえるよう、新宿に愛着をもった企業になってもらえることが理想です。

企業にとっても、ワーク・ライフ・バランスや地域貢献を通して発展していただけるためにどうしたらよいか、そのための企業間交流や研究する場づくり、中小企業の互助会的な組織づくりなどを行っていく必要があります。

(第1分科会)



3 ぶらりと道草したくなる楽しいまち

【将来のあるべき姿】

10年後、20年後の新宿は、区民にも来街者にも「道草したくなる楽しいまち」にしたいです。「道草したくなるまち」とは、区民によってまちの中にさまざまな「遊び」が用意され、来街者が「自分に合った遊び方」を発見し探せる、まるで「おもちゃ箱」のようなまちです。

わたしたちのまち新宿は、国内外を問わず、きわめて多くの人・モノ・情報が集まる、他には例をみないまちです。ここに新宿が群を抜いて優れているところは、おのずから、かりに異質なモノや猥雑さがあっても決して排除することなく、むしろ寛大に受け入れるところにあります。こうした種々雑多なものを吸収し、膨張しつつけながら発展してきたところに新宿のまちの特性・特徴があります。

こうしたまちの特性・特徴は、際立って個性あふれる、多様性あるまちをつくってきました。一例をあげても、政治の中心地である都庁があるかと思えば、夜のネオンサインまぶしい庶民的な飲食店・居酒屋が広がりを見せていたり、超高層ビル群に代表される巨大なビジネス地域があるかと思えば、一方でレアモノを扱う小さな商店街があったり。華やかな繁華街や百貨店・電気街があるかと思えば、味のある店主のいる隠れ家的な店があったり、また新しい時代を駆け抜ける先端商業地域があるかとおもえば、古い時代・風情が漂う住宅地や路地裏文化が混在する「新旧融合のまち」であったり、ちゃきちゃきで粋な江戸っ子がいるかとおもえば、様々な地方からやってくる学生・外国人の方が居住するまちであったり。こうしたまちの形成は違和感なくうまく溶け込み、むしろまるで探検でもできるかのような雰囲気をもかもしだしています。

時代の流れは旧きもの・異質なものを再開発で次々に消滅させています。規格化・統一化された都市の形成は、むしろ推進される傾向にあります。しかしこの時代に、あえて異なった文化・習慣、あまつさえ異質なモノまで寛容に受け入れ、これだけ雑多に入り混じり、きわだったマニアックさをもかもしだしているところにこそ、新宿の魅力があります。これは他のまちでは決して味わえない「新宿だけにしかない魅力」なのです。

われわれの好奇心を掻きたて、いつ行っても「遊び方を見ることができるまち」新宿。20年後の新宿は、「新宿だけにしかない魅力」をみつめ直し、今あるツールのすべてを活かした「おもちゃ箱」みたいなまちにしたいのです。そのためには、今あるツール・しかけは決して失うことなく、むしろ再発見・再評価し、持ち味を最大限に活用しなければなりません。そして新宿を、好奇心がくすぐられておもわずふっと寄ってみたくなる、元気の出る、何度も行ってみたいくなる「来街者がまた来たくなるまち」にしたい。またこだわり・お気に入り・隠れ家・行きつけのある、また奥深さ・奥広さのある、さらにいえばいろいろな世代間で遊び、遊び方が伝わる「新宿らしい多様性を楽しめるまち」にしたい。総じていえば「道草し

たくなるまち」にしたいのです。「道草したくなるまち」の創造は、新宿の文化・産業の振興につながり、ひいては区民の利益にもなります。

【現状と課題】

将来のあるべき姿である「道草したくなる楽しいまち」をつくる課題として、いまだ発掘されていない豊富な魅力・財産を再発見・再認識できる環境をつくることが挙げられます。現状では、従来からの魅力である歴史的建造物や寺社仏閣・新宿御苑や新宿中央公園、戸山公園などに代表される自然・遺跡・お濠・博物館・美術館などに、みどころとしての重きが置かれてきました。しかし新宿の魅力はこれに限らず、むしろ一つ一つのお店・店舗や居酒屋、染物や印刷に代表される伝統産業などにみる「本物へのこだわり」、銭湯などの産業活動や劇場・演芸場(落語)・スタジオ・映画館・音楽会・路上ライブ・古本街・アニメ・文学・お祭りやフェスティバルに代表される文化活動が味わえるところにあります。他にも露店・路地裏・夜景・旧地名・神田川に代表される水、神楽坂に代表される坂道・甲州/青梅街道などの魅力、そしてなにより、新宿に生きるユニークな「人」が、最大の魅力・財産なのです。したがって「将来のあるべき姿」に近づくためには、豊富な魅力・財産を観る視点、角度をかえてみる必要があります。

そのためにはまず、いまだ発掘されていない豊富な魅力・財産の再発見・再認識の作業を進めなければなりません。現状では、情報の収集・整理・共有・発信があまり進んでいません。これを推し進める必要があります。

つぎに「情報」を使いこなすことができる環境が必要です。現状では、自分に必要な「情報」がどこに行ったらあるのか、あるいは自分の発見した「情報」はどうしたら活かすことができるのか、などについて十分な対応できていません。したがって、「情報」に常に接しやすい環境をつくることや膨大な情報が集まる情報ステーション(知のネットワーク)やアドバイザーとしてのコンシェルジェ(案内人)を創っていく必要があります。

さらに「道草したくなるまち」は、歩く人の目線に立った理想的なまちづくりを必要とします。世代を越えて、子どもも高齢者も障害者もみなぎ歩きやすい、また歩きたくなるまちづくりをしなければなりません。現状では、広場や歩道など歩行者のための空間が不十分であり、駅前広場や歩道が狭い、放置自転車や置き看板などのため歩きにくい、乳母車や車いすでの移動が容易でない、などの問題があります。高齢社会にあっては、高齢者や身障者もまちを利用しにくくなっています。したがって容易に利用できるよう配慮した、ユニバーサルな店づくりやサービスを工夫する必要があります。また、地域の特性を活かしつつも、必要により、より配慮した良好なまち並み、景観のために看板や建物のデザインの規制誘導も必要です。さらに、まちなかに緑が乏しい、潤いに欠ける、憩える場が少ない、ということも指摘されます。まちなかの手軽な緑や水辺など、まちに魅力と潤いをつくりだす空間が不十分です。賑わいの場と一体となった小公園や緑のスポット、

街路樹の整備が重要だといえます。

【取り組みの方向性】

1. 来街者がまた来たくなるまち

区民の取り組みとして今できることは、第1によく知られた情報からマニアックな情報までを出し合うことです。これらをまとめて「新宿学」という地域学とし、20年後には「新宿観光検定」などを通じて確立させたいです。第2に区民は自分の経験を活かし、「まちの駅」「ミニ博物館」や「観光コンシェルジェ・観光ボランティア・新宿シティーガイド・新宿ものしり博士」の認定などを通じて来街者が求める「情報」を伝えます。

一方、区の取り組みとして今できることは、第1に区民の情報を活かすための制度構築です。「新宿遺産」の認定や「観光コンシェルジェ・観光ボランティア・新宿シティーガイド・新宿ものしり博士」の創設を行います。第2に来街者に便利なインフォメーション・PR体制の構築です。情報を「まちの駅」、「区のホームページ」、「広報誌」、「メールマガジン」、「地域マップ(「文豪・文学マップ」「劇場・演芸などの文化関連マップ」「職人探訪マップ)」づくり、「ユビキタス配信を備えた「案内板」の設置」等で幅広くPRします。第3に来街者の意識の把握に常に努めることです。20年後には、区民と区の協働作業によって、幅広い層の来街者が自分で「遊び方を探せるまた来たくなるまち」にしたいです。

2. 新宿らしい多様性を楽しめるまち

区民の取り組みとして今できることは、第1に多様性を活かすという共通した意識をはぐくむことです。第2に多様性を来街者にアピールできる仕組み・しかけづくりをおこなうことです。たとえば「楽しめるアジア的地域創造」「芸術村の創設」「路地裏文化の再生」や「新宿どろぼう市」「全国一のヘブンアーティストイベント(*)」などの企画を通じて、多様性への理解を高めていきます。

一方、区の取り組みとして今できることは、第1に区民が多様性を共有できるような環境づくり、すなわち多くの人・モノ・文化・情報を再発見・再認識するための機会と交流の場をつくりだすことです。第2に多様性をより活かすため、「来街者がまた来たくなるまち」と同様、来街者の意識の把握に常に努めることです。20年後には、区民と区の協働作業によって、まちの多様性がこのまま失われることなく残され、多様性を楽しめるまちになっています。

*ヘブンアーティストとは、審査により選定したアーティストにライセンスを発行して、公園や地下鉄の駅など、公共施設の一部を活動の場として提供することによって、「街のなかにある劇場」として都民が気軽に芸術に親しむことができ、アーティストと観客との交流をとおして芸術文化を育む場としていくものです。(東京都生活文化局 HP より)

3. 賑わいと魅力あふれる街 / 「歩きたくなる街」「歩いて楽しい街」

賑わいと魅力あふれる街は、ショッピング、飲食、娯楽、人々の交歓など、街に来る人のそれぞれの欲求を充たす様々な物やサービスが得られる、また空間的には車利用を抑制した、人間中心、歩行者優先の街づくりを目指すことです。

<ソフト>

- ・個性豊かな店がある - テナントミックスにより買い物、飲食、娯楽が色々と楽しめる。
- ・興味を引くものがある - 観たい演劇や映画などが観られる。
- ・楽しいイベントがある - オープンショップ、フリーマーケット、大新宿区まつり、新宿エイサー祭りなど多彩なイベントを企画、実施する
- ・情報が豊富である - 建物や施設、買い物・飲食、イベントなどに関する情報が常時提供され、誰でもアクセスできるようにする

<ハード>

- ・人と車の棲み分けし、歩きやすくする - モール化、歩行者天国の拡大、バリアフリー化し回遊しやすい街とする
- ・車の規制、人中心の街づくり - 路面電車(LRT)の導入、歩行者優先エリアでの巡回バスの導入
- ・アクセスが便利である - 駅から便利に行ける、駐車場・駐輪場が整備されている
- ・安心・安全である - 治安がいい、子供を遊ばせられる
- ・きれいである - 道がきれい、季節の植物が咲いている
- ・休息や憩える場がある - ポケットパークやベンチ、気軽に入れるコーヒーショップ

4. 新宿らしい都市文化(大衆文化)を創造し発信する

新宿駅周辺は「内藤新宿」から続く賑わいの歴史があり、花園神社のテントの芝居小屋やムーランルージュ、帝都座など大衆演劇・娯楽の揺籃の地でもあり、歌声喫茶など若者文化の拠点でもありました。この多様な街の文化、娯楽の遺産を受け継ぎ、新しい時代における新宿文化を生産、発信していくことです。

- ・映画、映像、アニメなどの製作工房の立地を誘導
- ・芸術家、デザイナーなどの居住による多彩な活動、交流、情報発信
- ・新宿らしい娯楽、エンターテインメントの復活、創造(例えば、ムーランルージュ)

5. 魅力的な街並みや良好な景観、快適な歩行空間を整備する

「歩きたくなる街」「歩いて楽しい街」は、誰もが快適に歩行できるよう、歩きたくなる歩行空間を整備し、歩行者の回遊性を高めていくことです。そして、そのためには気持ちの良い町並みや景観、潤いのある都市空間や都市の風景をつくりだすことです。

- ・放置自転車の撤去、看板等の規制を徹底し、建物デザインのコントロール

- ・道や広場の拡充と街路樹などの整備

6. 新宿の賑わいの最大拠点・新宿駅周辺地区の活性化

新宿駅周辺は日本を代表する繁華街ですが、盛り場性が薄れつつあり、交通混雑や狭隘な駅前広場、街の回遊性の欠如など魅力の相対的低下が懸念されています。新宿の顔として、「歩いて楽しい、歩きたくなる街」に向け具体的な提案をします。

- ・新宿駅東口の歩行者優先地区を拡大する

(JR線・靖国通り・明治通り・甲州街道に囲まれた地区)

- 歩行者優先区域での集配荷車輛の時間制限
- 優先地区を囲む道路下の駐車場は2層化、公共駐車場として一体運営とする。
- 駐車場から歩行者優先地区には、低速・環境対応型のバスを走行させる
- 各エリアにユビキタスによる情報発信を行い、来訪者を支援する

- ・新宿駅西口に歩行者優先地区を設置する

(京王百貨店前道路・甲州街道・新宿郵便局の西側道路・駅前ロータリーへの西からの進入道路に囲まれた地区)

- 歩行者優先区域での集配荷車輛の時間制限
- 西口駅前道路下の駐車場は2層化、公共駐車場として一体運営とする
- 駐車場から歩行者優先地区には、低速・環境対応型のバスを走行させる
- 各エリアにユビキタスによる情報発信を行い来訪者を支援する

- ・新宿駅東西地区の回遊を良くするため新宿駅東西自由通路の早期実現

- ・新宿駅西口から新宿公園に至る地上を歩行者が歩けるルート整備(現在は地下)

7. 歌舞伎町の再生、活性化

新宿区は「危険を感じる街」とのイメージがあり、その改善に向け「歌舞伎町ルネッサンス」の取り組みを推進する必要があります。風俗営業から脱却し、老若男女が集まり楽しめる街にするために次の具体的施策やプロジェクトを提案します。

- ・治安の改善 - 違法風俗産業の取締まり、治安改善状況や改善後の明るい街のPR
- ・風俗産業広告規制 - 卑猥な看板、通行障害となる看板の撤去規制
- ・多種多様な文化の体験できる街にする - 韓国、中国、インドなどの食体験など
- ・新たな文化、産業の誘致(映像など) - 新たな投資ができる環境を整備
- ・小区画土地の再開発 - 自治体による再開発組合設立支援、土地利用規制の緩和

8. 民間と行政の協働による街づくり

商業地区の賑わいと魅力の創造には商工業者等の積極的な関与(ノウハウ、資金、人材)が不可欠です。歩いて楽しい街づくりの一手法である道路のモール化は、車の利用規制を伴うため行政と地区内の商業者等の協働が不可欠です。

- ・モール化された道路空間の利用、維持管理する組織(TMO)や仕組みの導入
- ・買い物やイベントなど街の情報インフラの整備に民間のノウハウや資金の活用

(第3分科会・第5分科会)

4 誰もがわくわくする末端と先端のあるまち

【将来のあるべき姿】

新宿のまち、特に繁華街では「わくわくする刺激がある」という印象を述べる人が多いのです。まちに来てわくわくするのは、そこが多彩な顔と機能をもったまちだからです。効率性のみを求めるビジネス街だけでなく、ショッピングに、遊びに、繁華街に人があふれているからです。さらに、人の流れが路地裏へと続いていて、それも魅力になっているのです。路地裏の安らぎが、表の喧騒と皮一枚で存在しているのが新宿の特質ではないでしょうか。新宿の魅力はまた、最先端と隣り合わせで、なにげない日常を垣間見ることが出来ることです。日常性のなかに、ひとびとが大切にしている暮らしといのちがあります。新宿の原動力は、先端と日常あるいは先端と末端が、カオス(混沌)のようで見事に統一され、ひとびとに明確にみえていることです。いわばその許容量の大きさが限らない魅力になっています。先端と末端は、同じ地平で出会うことで、さらに高度な先端と末端に変化していく可能性を秘めます。そのとき新宿はさらに質的に向上し、進化していくのです。ひとで賑わい、ひとが出会う。欲するひとと提供したいひとが、たくさんの出会いをする。産業的にいっても、この出会いがいかに多くの可能性をもたらしてくれるか計り知れないのです。新宿には巨大なエネルギーと奥深い包容力が存在しているから、言い換えればチャンスは探せばいくらでもあるから、ひとはわくわくし、ひきつけられます。普通なら衰退してしまうような小さな店も、末端のように思われる商売も、最先端でありすぎる仕事も、「異端」も「特殊」も、この新宿なら生きていけます。自分の才能や努力次第で未来の夢がかないます。

商業を考えてみましょう。10年後、20年後には、百貨店、大型専門店、量販店がひしめく繁華街はどんな顔に変化しているのでしょうか。消費者の動向は移ろいやすいし、生活スタイルも変わります。当然、大型店はそれに対応していきますし、地域の商店街も変わっていくでしょう。便利さや安さを求めてさらにコンビニエンスストアやチェーン店が広がるのか。多少不便でも本物志向のこだわりの暮らしに変わるのか。競争は間断なく続くでしょう。そのなかで生き残っていく商店街は、自身の中から、他にはないオンリーワンを見つけ出し、未来の暮らしを先取りしたり、ひとのぬくもりを大切にしたりした、個性的な魅力ある店が並んでいるでしょう。地域ブランドを揃えた店の隣りに、モダンアートの専門ギャラリーやおしゃれで気楽に使えるミニホールやミニスタジオがあり、こだわりの郷土料理店や頑固親父の居酒屋と隣り合わせに、アジアンレストランやアフリカ料理店が頑張っているでしょう。それは厳しい商戦に勝ち残ったひとびとのお店です。日本人ばかりではありません。こだわって、飽きずに頑張って、信用された人々です。こうしたひとたちの努力が、商店街を繁栄させ、生き残らせるのです。

【現状と課題】

「先端と末端」という言葉を言い換えれば、時代の先頭を走る「先端文化」と、伝統としての評価には属さない古い文化や日常性としての（遺伝子という言葉が適切でしょうか）「末端文化」ということです。新宿はまさにそれら異文化の「衝突」が日々まちのどこかで行われているので、刺激的でわくわくするのです。多様な文化が隣り合っている不思議ワールドともいえます。その共存と両立には、排除の論理ではなく受容の論理が必要です。それが新宿の奥深さを担保します。

さて異文化をもう一度確認してみましょう。新宿的にはまず、外国と日本がくっきりとした構図で浮かびます。都心と郊外も同居しています。東京と地方も見えています。生産と消費もあります。そして生産者（供給者）と消費者とがいます。これらは一見対立する概念のようですが、よく考えると、新宿という器の中では、共存し助け合い、同じ課題に向って相互に協力し合って、創造したり解決したりせねばなりません。その点両者はコインの裏表です。

先端と末端がであるのが「広場」です。出会いは、物理的でもあり、情動的でもあります。「広場」は駅前であり、公園であり、商店街の通りであり、公民館であり、図書館であり、インターネットであったりします。

ところで、いままで両者は充分に出会い、まみえてきたでしょうか。そうは思えません。大量生産、大量宣伝、大量消費は、強大な生産者による画一的な商品や「情報」の押し付けでした。全国一律のチェーン店は、たしかにある種の便利さを提供しましたが、その反面一般の生活は単色になり、食品の安全に対する不安を惹起したり、商品も文化も没個性になったりしました。そこでは、一方的な出会いの強制があったからです。

わくわくするまち新宿では、商店主と顧客が充分にコミュニケーションをはかり、生産と消費をともに考え、共同して地域ブランドを創造し、商品開発を進めます。時には、専門学校や大学と共同開発を進め、触れ合う商業、創造する産業、消費者とともに進む商店街、地域通貨のある共同体的商店街などを提案します。

対立する立場から、共存する立場へ。対抗する役割から、協調する役割へ。私たちの課題は、利害が対立するように見える相手への認識、気づきから出発し、受容と創造に向って二人三脚で進みます。

そのための方法としては、新しい地域祭をつくります。伝承された祭りは、古くからある地元の祭りとして大切です。一方、新世代がつくる21世紀の祭も共存したらいいでしょう。新しいアイデアのもと、既存店舗の経営者、新店舗経営者、旧住民、新住民などが寄り集まって行われる祭も増えてきました。新しい祭は共同体意識を強固にし、コミュニティを活性化します。そして新しい出会いから、個性的な商店街や新産業が生まれます。

【取り組みの方向性】

1. 地域の賑わいと顔の見える商店街づくり

大型店、大資本系列チェーン店の進展で、競争の激闘の中、中小商店の経営環境は厳しい。商店街の空洞化は、ことに生鮮三品をはじめ業種揃えもままならない現実は新宿も例外ではありません。10年後、20年後に生き残っていくためには、個性的な魅力ある店づくりへの心構えと地域に賑わいをつくり出す商店街のリーダーの意欲と仕掛けづくりが必要です。

自分の商売に誇りをもつこと

「自分の店は地域に必要なんだ」という自分の商売の社会的役割にプライド・自信を持つことです。

自分の感性も大事な経営技術

こだわりの品揃えをし、自分の店の品に信頼をもちます。こだわりの逸品こそが客の肥えた目を引き付けます。流行にズレた店も文化的で、個性的です。古い店構えでも、心構えにこだわりをもった店に甦ります。

新宿にしかないオンリーワン

地域性をもたせた品づくり、地域ブランドづくりを地域の仲間を進めるとともに、アピールし、メッセージを発信していく。

地域でのコミュニケーションの輪づくり

御用聞き、配達サービスによる地域密着、固定客との結びつきを深める。また、地域情報を収集することで、顧客のニーズにあった商品情報の発信の仕掛けづくりをする。

2. 顧客参加の商店会の新しい波

表通りは居住者もふくめて地域の「広場」です。そこは商店会のイベント以外に地域に開放すべき場所だし、商店会は居住者ともっと手に手をとって、地域をよくしていく努力をすべきと思います。いまや商店会は、地域問題を考える上での土台・基盤でもあるのです。それがまた商店会活性化への早道でもあります。

しかし、近年は商店主の高齢化や後継者難もあって、商店会組織そのものがよどみ停滞しています。

そこで、地域商店会活性化のためにこの際思い切って居住者を商店会に参加させ、顧客を加えた新時代の商店会を形成します。

もちろん居住者や顧客はブレンですから、商店会費は不要ですし、いろいろ提供するアイデアには報奨金も用意したりしてもいいと思います。つまり商店会の有能な客分にしていけるのです。

顧客や居住者が望む商店街、商品構成、内装、看板、ウインドーディスプレイ、イベントなどを共同企画して、イベントが成功したり、活性化によって利益が出た場合は、その原資を地域の介護や環境に還元していきます。

そうなれば地域の商店街もイベントも皆のものになり、表通りは文字通り「広場」になっていき、商店街はよみがえります。

3. 残したい「戦後風俗新宿遺産」を創設する

宇多田ヒカルの「ディーブツァー」の宣伝ポスターで、一躍脚光を浴びた「新宿ゴールデン街」。団塊の世代のホームグラウンドとしてあまりにも有名な当所も、バブルの頃は、3坪の店舗の立退き料が1,000万円にもなり、町は灯が消えたようになりましたが、再びこの町に活気が戻り始めました。有名な女流俳人がバーのママになって話題を集めたこともあり、若い人たちがここに出店し始めています。新宿の戦後は、尾津組の「新宿マーケット」、和田組の「和田マーケット」などから出発しましたが、進駐軍の露天排除によって三光町に移転した露天商が作った町が「ゴールデン街」。いわば新宿戦後史の生き証人です。約200軒の店は、3坪から5坪の極小飲食店がひしめき合っていて玉石混交ですが、そこがまた新宿的カオスといわれます。直木賞作家佐木隆三、芥川賞作家中上健次とゴールデン街から生れた文学は数知れず、映画、演劇、詩、美術など文化芸術に果たしたゴールデン街の役割は計り知れません。ここを戦後風俗の第1回新宿遺産と認定し、長く残したいと思います。第2回は、神楽坂和可菜旅館(昭和23年建設)や花柳界の検番、新宿西口思い出横丁なども候補です。ただし公式の文化財指定よりも軽度のものとして位置づけ、認定後の規制も、緩やかなものとします。

4. 遊歩空間としての路地文化を継承し、路地を保全する

四谷荒木町、神楽坂など新宿区には独特の路地文化があります。路地は概ね道幅一尋ひとひろと狭いのですが、車社会の中では人しか通れない道として貴重です。打ち水、植木鉢の陳列、子供の安心できる遊び場--といった生活文化の特徴があります。谷中、根津、向島、京島、下北沢などの路地も有名ですが、荒木町や神楽坂は、花柳界・料亭街が路地に面した地域として特筆されます。ところで近年、減少する都内の路地への関心が高まり、若者達が散策や回遊を始めています。彼らにとっては、路地はむしろ新しい出会いであり、その迷路・迷宮性に魅了されて、新鮮な発見を次々にしています。歩行回遊の「装置」としての路地は、ヨーロッパたとえばベネチアなど中世都市に見られる文化と比較されるように、モダン都市以前の雰囲気漂わせ、21世紀に引き継ぎたい魅惑的空間でありかつ伝統文化です。神楽坂の路地は、街の人々や街づくりNPOなどが将来にわたって残そうと方法を模索しています。新宿区は官民一体の保存構想を早急に立てたいと思います。

5. 新しい祭の創造で、地域の連帯と一体感の創出をはかる

祭の準備と実行は、それに参加する人と人を深く結びつけます。また準備の過程でさまざまな壁にぶつかりますが、それらを乗り越えることによって、参加者は相互に成長しながら大きな喜びを獲得します。「ハレ」である祭は、コミュニティの土台を築く貴重な舞台であり、孵化器でもありました。

しかし新宿のように歴史の古い区域では、地域の地縁集団が確固として出来上がっているために、新住民が入り込めない場合も多いのです。さらに伝統的祭には多くのしきたりがあり、その慣習を踏襲することに神経をつかい、成し遂げたときの開放感が薄いのです。ところで新宿文化の真髄は、伝統と変革 - - 不変と変化の相克です。

このセオリーを祭に援用するならば、新宿には伝統的な祭に平行して、だれもが気楽に参加できる新しく若々しい祭が必要です。そのなかで、新しい地域アイデンティティを創出していくことが求められます。

近年ヘブンアーティストの活躍が顕著です。静岡市名物になった大道芸人の全国大会や三軒茶屋のヘブンアーティスト祭は多くの若者を魅了しています。新宿では1960年代、70年代には全国的に先駆けて早くもストリートパフォーマーやハプニスト(即興でパフォーマンスを演ずる人)が登場していました。かれらのハプニングやパフォーマンスからはつねに新しい刺激が生まれ創造に繋がっていました。

現在、新宿にジャズ祭が生まれ定着してきていますが、各地にあたらしい祭の誕生を促進し、その祭をネットワークし、一年中どこかでおもしろいことが行われているようにしたいものです。どろぼう市(骨董市、ぼろ市)や野外演劇祭は、新宿らしいものとして世代を超えた支持を得るとおもいます。新しい酒は新しい器で楽しむものです。町内会、商店会などの古い紐帯をこえた組織で運営したいとおもいます。

6. だれもがいきいきと生きるまちをつくるために

「安心、安全は当然であり、活気のあるまち = 新宿区」を広くよみがえらせる為に、現在はまだ一部の有志によって、「まちを掃除する」事業が展開されているが、まちを掃除することは、ごみが減り、清潔なまちがよみがえること。そのことは犯罪抑止につながり人々の笑顔につながる。そして結果として、まちに活気が取り戻され安心、安全なまちが形成されていく。

まちの掃除は簡単なこと = 気が付いたときに自宅や自分の店の前だけで良いからガムやごみを拾う・掃除することを毎日実行すれば良いことです。

一人ひとりが、できることから一歩ずつはじめれば、最初は一握りの人々のいとなみがだんだん広がり、やがて大きな波になり、かつての新宿区すなわち「だれもがいきいきと生きるまち」が戻ってきます。

(第5分科会)

5 日本を代表する魅力ある超高層ビル群の再生

【将来のあるべき姿】

西新宿エリア内では再開発の歴史として、伝統を生かして再開発プロジェクトが推進され住宅地区、業務地区、文化地区等が増加し、まちのかたまりがバランス良く発展します。

西新宿超高層ビル群の既存のエリアについては、不足している賑わい空間、ビル間の交流を進めIT社会、高齢社会に対応する時代にあった魅力あるまちができ都市間競争に勝ち残ります。

多くの人の区分所有となる超高層マンションは、住む住民にとっては風が強く窓の開放の頻度が少なくなり、自然通風が少ないことによる健康の問題等が徐々に生じ始めます。また、積立金不足と高額な修繕費用の発生等、維持管理の困難さも生じ始めます。一方、周辺の住民にとっては、景観問題が生じています。このように住む住民と周辺の住民の両方に様々な課題が露呈して行き詰ります。今後は、積極的に取り組むべきではないと考えます。

「新宿駅南口」Rビル計画については、道路事業としては大変意義のある事業となったとともに回遊性も高まり、日本を代表する乗降駅として再開発されました。そして、周辺への波及効果のある誰もが訪れたい集客力のある複合施設が生まれました。次は西口駅前の整備に着手します。

【現状と課題】

新宿西口に広大な浄水場があり、昭和43年の11区画の売り出し以来40年弱の再開発の歴史があります。遠望すれば高層ビル群として日本を代表する都市景観となっています。しかし、広い道路がビル間の交流を遮断し、固まりとしてのまちとしての賑わい、人の交流、文化が充分とは言えません。また、これからの高齢社会の流れの中で対応できていない面が多々あります。

一方、新宿西口超高層ビル群に隣接している西新宿3丁目から5丁目は再開発の息吹が感じられますが、遅々として進展していません。

また、西新宿以外の地区について超高層マンションを切り口とした再開発が散見されますが、超高層マンションの建設が景観、周辺住民への影響等により様々な問題が生じています。

超高層ビルの立地、まちなみ景観、超高層住宅、既存超高層ビルの問題点、新宿駅の問題点等様々な角度から論点を整理して課題を解決する必要があります。

【取り組みの方向性】

1. 新宿超高層ビル群の魅力開発計画

新宿西口の超高層ビル群のまちの魅力対策として次の提案をします。

駅と中央公園を結ぶ中央通り上部にユニバーサルデザインの行き届いた緑溢れる遊歩道を整備して人の交流空間として活用する。

交通量の少ない道路の一車線を人の交流空間、自転車道路等多目的利用が可能となるように転換して歩行者優先空間を取り戻す。

駅西口の一定地区を歩行者優先地区として設定して賑わいと交流を図る。超高層ビル2階部分又は地下1階にビル間を回遊できる「歩いて楽しい」賑わいのある空間づくりを官民一体となって検討に着手する。

2. 西新宿エリア内での再開発プロジェクトの推進

西新宿超高層ビル群のまちのかたまりを発展させる次の提案をします。

西新宿3丁目から5丁目の山手通り、青梅街道、十二社通り、甲州街道に囲まれた大ブロック地区の地元で盛り上がっている再開発の動きを公共サイドで前向きに実現可能な方向でサポートする。

具体的には、都市計画サイドの支援、再開発手法の支援、生活道路、地下道、駅の基盤整備の支援が必要。

特に、西新宿3丁目地区はオペラシティに続く文化都市としての今後の歴史を作る潜在力があり、本地区を再開発の起点として期待できる。パークタワーからオペラシティまでの一体の拠点地区を形成する基盤のインフラとして水道道路の拡幅は必要。(NSビルから角筈の交差点までは整備されているので山手通りまであとわずかである。)なお、西新宿4丁目南地区にセブンシティ跡地の新築工事が進捗しているが、将来を考えた水道道路からの後退は大変意義のあることである。

3. 超高層とまちなみ景観

景観については新宿区内の各地で景観対立が生じているが、考え方を次のように提案します。

西新宿の場合、敷地が広く制約も少ないので超高層ビルと中高層ビルの配置により街並み形成、建物デザイン、色彩(屋外広告物も含む)について比較的統一し易く良好な都市景観を創造することが可能である。

しかし、業務用ビルでは経営上成り立たない西新宿以外のその他の住宅地域に超高層マンションを建設することは景観上問題がある。

異質な景観とは「高さ」であり、突然100m以上のビルが誕生するの

であるから「まちなみ」に合わせることは物理的に不可能である。

また、一步譲って計画が変更できないのであれば低層部分、特に、1階の用途が周辺に対してどうなるのかが重要である。周辺の景観に合わせるには2又は3棟に分けて計画することが常識的である。その場合、オープンスペースは減り、緑も少なくなるが景観のプライオリティが優先するのであるならばやむを得ない。

4. 超高層マンションについて

多くの人の区分所有となる超高層マンションは、住む住民と周辺の住民の両方に様々な課題を残しており積極的に取り組むべきではない。

住むことによる害があげられる。海外では次の理由から中止、禁止している国は少なくない。

- ・ 犯罪の多発。低層の倍以上
- ・ 維持管理の困難さ。修繕の仕方又は費用が高額
- ・ 都市景観の不相応。

更に、居住性から人間の健康への影響を含めて次の問題点が指摘される。

- ・ 風が強く窓の開放の頻度が少なく自然通風が少ないことにより人体による影響
- ・ 子供を外へ連れ出す頻度が少なく子育ての成育環境への影響
- ・ 通風のなさによるダニ数の増加

5. 超高層と立地

業務棟、住宅棟においてガイドラインを作成する必要がある。

区内の超高層建物の位置付け、不立地とするルール作り等のチェック表が必要である。つまり、区内で超高層建物（高さ100mの定義）が建築可能な地域を定めることとなる。具体的には、地区協議会にて住民の一定の理解を得る方法や地区毎のマスタープランに基づきルール化する。現在、住宅地の超高層建物計画は1棟（市谷本村38Fの125mのみであり、夏目坂上は30Fの97mである。）今後、100mに抑えれば良いという計画も出るかも知れないので高さ20Fから30Fクラスの中高層建物の住宅棟のガイドラインもさらに必要である。

多くの人の区分所有となる超高層マンションは、住む住民と周辺の住民の両方に様々な課題を残しており積極的に取り組むべきではないが、西新宿の一定の地域で世代層、職種層での必要性があれば「住むことによる害」については害を除く要素がカバーできれば取り組み可能である。

- ・ 過半を占める所有者がいて責任ある維持管理ができる。
- ・ 建物で過ごす時間の短い人が利用する。(子育てには利用しない。)
- ・ 超高層業務棟との職住接近型の利用
- ・ 住居系以外の使い方

6. 新宿駅ビルの超高層ビルについての提案

回遊可能な歩行者空間は勿論であるが、ビルの低層部の設計に当たっては周辺に対してできるだけオープンに開かれた空間が重要である。特に、西口地区と南口地区との関係及び東口地区と南口地区の関係をJR以外の敷地、公道、民有地を含めて総合的に魅力ある空間を創出することが重要であり、南口の立地のみ高める計画は避ける必要がある。

シンボルタワーとしての超高層ビルを建設することは問題ない。しかし、この事業が公共性のある事業であり、またJR東日本という会社も公共性の強い会社なので魅力ある施設(単なる魅力ある商業施設だけではなく周辺への波及効果のある誰もが訪れたいという集客力のある複合施設)が、つくれるかどうかのポイントである。一般的に言われる「周辺への配慮、地域社会への溶け込み」はまさにこの点にあり、買い物等は本施設だけで賄え、周辺へ人が流れなくなることは是非避けて頂きたい。(都心型水族館、美術ギャラリー、博物館等上野公園の施設をコンパクトにしたようなイメージや若者からデートコースとして選ばれる空間づくり等)

類似施設との対比として、京都駅ビルや名古屋駅ビルの施設構成を比較するなかで反省点も踏まえ魅力ある空間、施設を考える必要がある。また地元説明会によると基盤事業の施設でバス台数、駐車台数の確保の根拠が良く分からず、不足している感じがする。

「駅ナカ」の商業施設として説明会図面によると約1600㎡の施設があるが、大宮駅では施設の拡充で乗り換え客が駅ナカで買物を済まして地元の商店会に影響を及ぼしていると言う。適度の施設は利便上必要であるが規模を適正にして欲しい。

駅が東西を分断して障壁となっている。自由通路をメインに考え将来的には改札を無くす方向も検討できないか。このバリアは障がい者の移動も妨げている。駅ナカ中を通過して移動する方が楽ではないか。

7. 超高層と公共建築の使い方

業務棟の事例の隣接地である西新宿4丁目南は利用者が少ない小中学校、老朽化して容積率の未消化の都営住宅等公共用地が存在する。民間主体の

再開発に積極的に民の建物と公の建物が複合して活性化を図ることが考えられる。

建物がある程度汎用性のあるもの（時代のニーズに可変可能な工夫）としての地域の公共センター、児童館、ことぶき館、小、中学校を配置するのはどうだろうか。又、幼稚園と小学校の分離、学校敷地、公園、歩道と車道の分離の固定観念をなくして、新たなまちづくりをすることが考えられる。

8. 管理方法の切り口についての提案

超高層ビルを建設する場合、オープンスペースに質の高いみどりを整備することは必要条件だと考える。みどりの配置は周辺住民も含めて歩いて楽しい歩行者ネットワークとセットとして欲しい。これからの再開発は広場以外に低層部のビルの屋上緑化も検討して欲しい。

維持管理については開発者だけに任すのではなく区民のサポート及び行政のサポートにより公共財産として守る仕組みを考える必要がある。西新宿の超高層ビル群は防災設備等のハード面は技術の向上がみられるが活用する人的な面では従来と変わっていない為避難安全対策の向上が求められる。

西新宿の超高層ビル群は高齢者関連施設が不足している。街づくりの観点からかかる施設も並存して欲しい。特に、関連施設には予防上の観点からのスポーツ施設も含まれる。

（第3分科会）

新宿駅周辺地区についての具体的提案

賑わいと交流



バリアフリー化のイメージ



老若男女が集まり、一日中楽しめる街



楽しいイベントの開催(エイサー祭り2004)



駐車場と歩行者優先地区を行き来する
低速・環境対応型バス

新宿駅東西自由通路



東西自由通路の設置イメージ(例:品川駅)

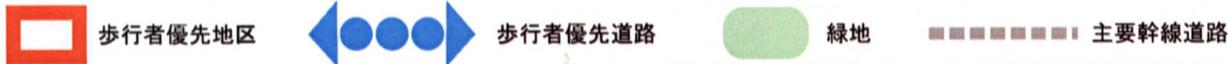
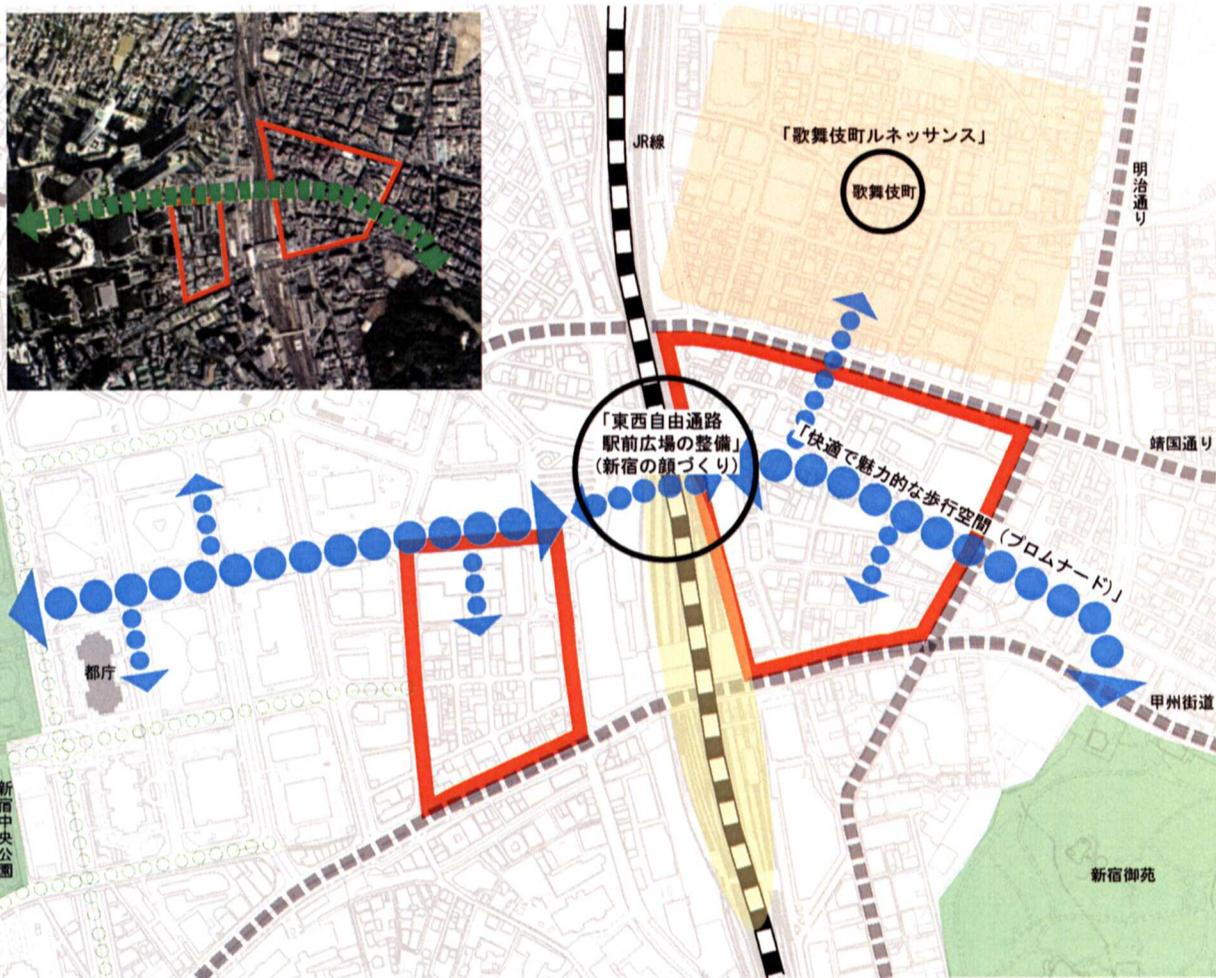
歩きたくなる新宿駅西口



新宿駅西口～新宿中央公園の歩道の整備



緑豊かな新宿中央公園



歩きたくなる新宿駅東口



歩行者優先地区のモール化のイメージ



明治通りを歩行者天国とした時のイメージ



緑豊かな新宿御苑

6 車中心から人間中心へ

【将来のあるべき姿】

「みちはだれのものかを考え直し、ゆっくり歩いて街を楽しもう」をキーワードに、誰もが快適(安全・便利・楽しく・気持ちよく)に利用できる「みち」を目指した「緑(森の風)の環」・「水(川、濠)の環」・「人(ネットワーク)の環」が創られています。

「ひとがくらす」ということのニーズに具体的に応える「みち」のかたち。

また、「人が訪れたい」と感じる「みち」のありかたを考え、取り組めるしくみの実現し、様々な角度からの検討を重ね、更に新宿区から「みちの在り方」を国などに発信できる体制が整えられています。

大人が談笑(井戸端のような中間領域)する傍らで、子どもが走り回ったり、ケンパをして遊んだり、誰に追い立てられることなくゆっくりゆっくり歩けるような「みち」が実現しています。

ヒートアイランド現象を緩和する自然(森)の涼風を楽しめる場所に「みち」になっています。

もう少し向こうまで足を延ばしてみたいと感じる賑わいと休憩ポイントが「みち」に点在しています。

ゴミが落ちていない。フラットで利用し易い。イザという緊急避難時に障害物に巻き込まれない歩道の管理が行われています。

区民の3倍近い来外者を受け入れる新宿区住人の心のゆとりが持てるようなみち空間がつくられています。

新宿区民と行政が協働し、腹をくくった今後の取り組みにより実現していきましょう。

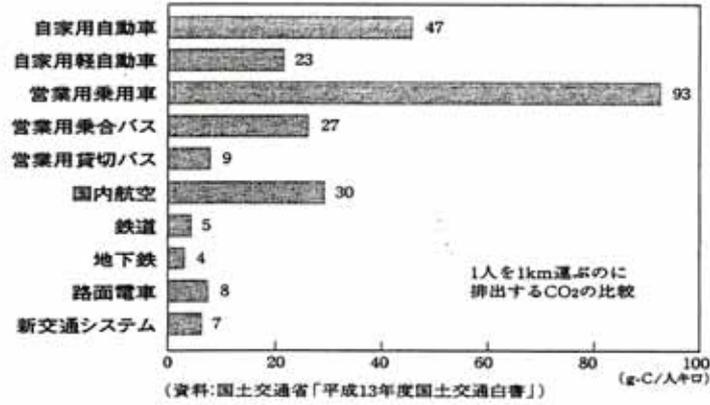
【現状と課題】

現在、新宿区の自動車登録台数は62,030台(2003年度末)で、1世帯あたりの台数は0.4台と、全国平均(1.6台)よりかなり少なくなっています。しかし、幹線道路が縦横に走り、区内の通過交通量は膨大で増加傾向にあります。

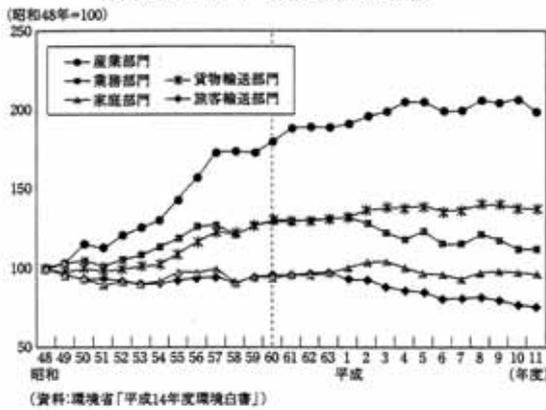
自動車中心の道路整備は、自動車利用を控えていた潜在的な需要を掘り起こし、「外部不経済(*注)」といわれる現象をおこします。

自動車を持たない、また自動車を利用できない区民が圧倒的に多い中、交通権は通過交通による区外からの自動車に圧倒的に奪われています。自動車に過度に依存した都市交通からの脱却に向け思い切った人と車両との棲み分けが求められています。道路の環境を歩く人や住む人に取り戻す必要があり、道幅に応じた歩道や緑地を作っていくことを検討します。

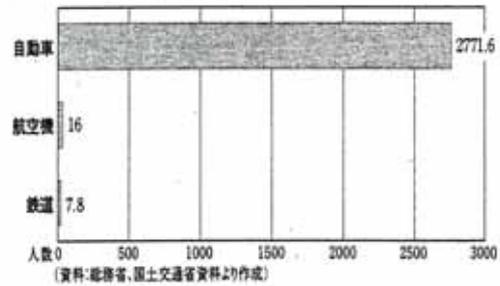
旅客輸送機関の二酸化炭素排出量



部門別のエネルギー環境効率性の推移



1億人時間あたり死傷者数



*注: 個々の企業や個人の経済活動によって、他の企業や人に悪影響をもたらす効果。自動車の場合、道路混雑から環境汚染まで範囲は広い。

参考: 路面電車ルネッサンス 宇都宮浄人著

【取り組みの方向性】

1. 道路の幅員別のあり方

ア 幹線道路(20m以上)*イメージ図参照

*路上(車道)駐停車禁止

区内に点在する公園や河川・堀・藩邸(7つの森の復活)を街路樹で繋ぎ、区内に緑の風を通す。

ヒートアイランド化を少しでも防ぎ、より良い環境にしていくために、各公園からの風を区内に流す。ビルに遮られたり、途中で途絶えたりすることなく、連続性が必要。公園から幹線道路に風を引き出すみちの在り方として、より効果的な形の検討が必要である。

街路樹の定義:道路法の定義によれば、街路樹とは「道路用地内において、車道と平行に列植されている高木」をいう。高木とは、高さ3m以上の樹木のこと。

樹木のCO²吸収量:大人一人が1年間に排出するCO₂はおよそ360kg。樹木が大気中のCO₂を吸収する量は、樹種や時間帯によっても異なるが、同量のCO₂を吸収するには、おおよその目安として直径15cm・樹高6m程度の落葉広葉樹が1本必要だといわれている。

落ち葉の管理:街路樹の維持管理は、植樹した行政が担う事になっている。国道の街路樹は国、都道府県道では都道府県、市町村道では市町村となる。したがって本来は落ち葉の清掃もそれぞれの行政機関が行わなければならない。しかし、落ち葉の管理にまで手が回らず、時に地域住民を悩ますタネになることもある。沿道以外の住民も落ち葉掃除を行う岐阜県岐阜市など、地域住民と行政が協力し合う事例が増えてきている (日立ビルシステム HP より)

・高木等で風を繋ぐ

*高木の選択について

落葉樹:季節を楽しめる。浄化作用が高い。

落ち葉の清掃作業が必要 堆肥としてリサイクル可能

常緑樹:通年通してグリーンを保つため、視覚的效果がある。

大気汚染に強いが、浄化作用は低い。

落ち葉清掃が年間通して必要。



出典：「大气浄化植木マニュアル」（日立ビルシステム HP より）

- ・河川に散歩道を作り水はけの良い土にする
- 自動車・自転車と電動車椅子・車椅子（電動）歩行者の棲み分けをする
- ・自転車レーンの設置（電動車椅子の利用も可能とする）
- 安全な歩道の管理
- ・看板等の不法設置、放置をさせない
（ゴミ、看板、はみ出し商品、宝くじ売り場等）
- ・歩道に障害物を置かない
- ・防犯、通報システムの設置
監視カメラ・スピーカー設置、駐車禁止や不法投棄の監視及び注意をする。
- ・傾斜を抑える
全体の傾斜や車道への傾斜・歩道をまたぐ車庫の傾斜等
- ・歩道と車道の高さは同じに。境目の段差は 1cm
縁せき（30cm 以上）設置。幹線側の排水の取り方を L 字溝でなく U 字溝にする。
- ・全ての歩道に点字ブロック（夜間は発行するしくみ）
歩道と同色にせず、幅を限定し 2 重等の過度な設置をしない
（歩行や車椅子・ヘビーカーの障害物にもなる）
- * 歩道の条件により幅を決める。ブロックやパネルはコストと耐久性に問題があるため、ライン引きを利用してはどうか。パターンをつくり、区で特許が取れるのでは。
- ・歩行者のマナー
イヤホン+メールによる歩行により、車椅子の回避等、声かけしても届かない。
（ワンセグ等で更に増加する可能性も）
無理な横断や団体での歩道占有等。
駐輪スペース・荷捌き（一時停車）スペース
- ・路上駐車の原因となるコインパーキングをやめる

バス停や荷捌き等の一時駐車用スペースは設置(駐停車禁止)

24h ゴミ置き場設置

- ・生活サイクル違いや店舗の閉店時間と回収時間の時間差により、歩道にゴミ袋が放置状態になるのを防ぐ。
- ・デザインを公募し、街の景観を損なわないものにする
- ・カメラで不法投棄チェック
- ・ゴミ回収システムを検討(ゴミが溢れたまま放置しない)

タクシーの客待ち制限

- ・客待停車はタクシープールのみ。路上停車禁止。

慢性的な路上駐車状態になり渋滞や事故の原因になる

素材

- ・電線等の地中化と同時に低騒音舗装に

トイレの設置

- ・ゆっくり散歩ができるよう、「誰でもトイレ」を店舗や企業の協力で設置し歩道に案内を出す

福祉重点地区

- ・高田馬場駅～早稲田通りの歩道にアーケードを設置

ソーラーパネルを貼る(照明等の電源確保)

- ・歩道の景観と安全を考慮の上、有料広告スペース設置
収益を歩道管理に充てる

- ・歩道管理者の設置(不法物の規制権限や美化等の管理)

歩道を楽しむ快適に利用できる工夫とわかりやすい案内

(デジタル(QRコード等)とアナログで)

- ・避難経路(避難場所)、トイレ、各施設や名所の案内等

低木の代わりに花壇やベンチ・ミニ屋台を設置

- ・低木はゴミや荷物置き場になる。花壇を協同管理したり、ベンチの設置することで散歩の休憩やコミュニケーションを生み出す。

- ・貸し電源や水道を設置、ミニ屋台ができるようにする。

イ 補助幹線道路(16m以上)*イメージ図参照

- ・幅によって、歩道・自転車レーン・街路樹を設置

ウ 地区内主要道路(16m未満)*イメージ図参照

- ・1m以上の歩道+2m以上の自転車レーンを確保。

残り車道が6m未満の場合、一方通行

エ 生活道路(8.5m未満)*イメージ図参照

街路樹と埋め込み型の縁せきとガードレールで安全な歩道を確保(1~2m)
一方通行(車道部分6m未満のとき)

オ 狭小路地(6m未満)*イメージ図参照

電線等の地中化

・趣のある路地を残す

火災感知自動通報及び消火システムを設置

車両進入禁止又は一方通行

・ロボットボラードで制限

路面の狭さく・歩道仕様で進入や速度を制限

2. 歩行者天国(車と自転車乗り入れ禁止)

ア 線での解放区*イメージ図参照

新宿通り~新宿御苑横~四ツ谷出張所

「新宿通り」通年歩行者天国

空中親水(シャワーカーテン)を設置、玉川上水の水源にする。 落合処理場からの再生水を引く

「新宿御苑横」1車線一方通行、土日歩行者天国

・玉川上水計画に伴い、段階的に御苑側の1車線まで広げる。

・ビル側の歩道にオープンカフェ。ロボットボラードで車両規制

・新宿通りから四ツ谷出張所まで水を流し、連続性を持たせる。

*現在の御苑横は双方向の自動車通行があり、遊歩道が16時で閉門になるため、人通りは少ない。

段階的に現遊歩道を1車線まで広げ、車両規制をかけてオープンカフェ等を実現する。みちの博物館を情報発信館(博物館)と路面電車の駅にする。

イ 面での解放区*イメージ図(地図)参照

*各地区を4分割、日曜日毎に面での歩行者解放を(車両進入規制)

第1日曜日(A地区)・第2日曜日(B地区)・・・のように決める。

・住人の高齢化が進む中、様々な企画が開催されるが、参加者は少数でメンバーも決まっている。企画も「提供される」形が多く、日程も限られている。

安心して外出できないこともあり、そういった方は家の中にひきこもりがちになる。上

記案が実現すれば、安心して外に出ることができ、「自由に」「普通に」散歩や買い物・その他が地元で楽しめるのではないか。

週毎に解放区が変わることで、一区間だけではなく、その場所場所での交流も生まれ、月に1度でもあれば、地域の人々が無理なく知恵を出し合って自由に企画が楽しめる。子どもも安全に路で遊べ、地域との大人との交流も自然に楽しめるのではないか。

・歴史や記念館(博物館)等の経路も路にペイントできれば、地元の歴史や文化が楽しめる。

区内の様々な場所で実現すれば、マップを作成し LRT(路面電車)やコミュニティーバス等に掲示。家族で週末のプランを練ることができる。

3. 駐車場

街の中心部から外れた場所(地下鉄や路面電車・バス停の近く)に大型「駐車場を設置」

- ・利用料金を格安にし、循環バスやレンタル自転車・電動自転車制度をつくり、街中に車をなるべく入れない工夫をする
- ・中心部との駐車場料金に価格の差をつける
- ・駐車場を結ぶバス・自転車タクシーの企画

* 伊勢丹の駐車場の問題。

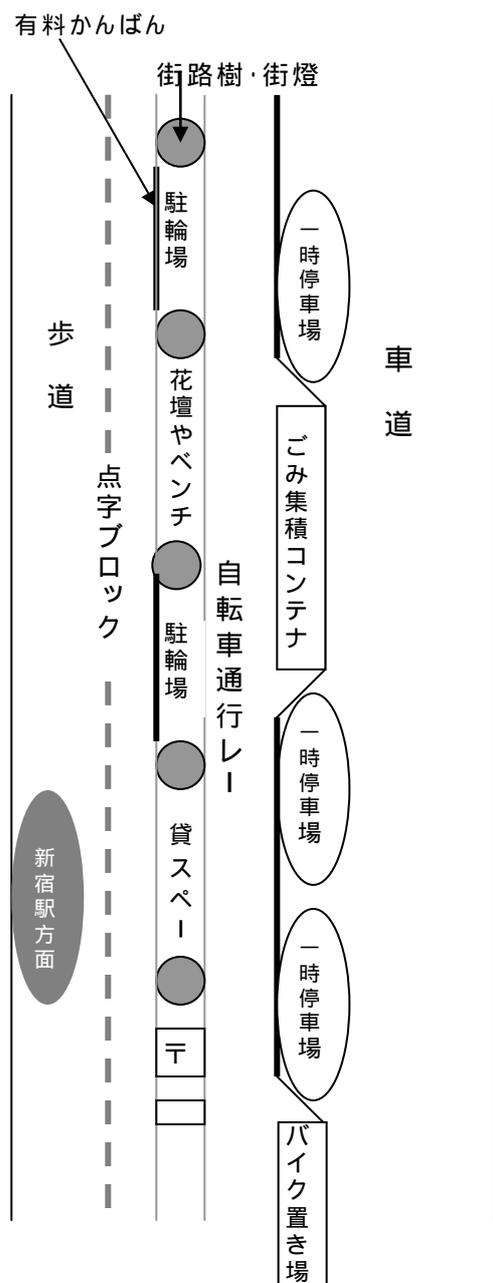
駐車場待ちの車の停車により、渋滞やバス乗降に弊害が出ている。

3丁目の駐車場は閉鎖して5丁目の店舗に移動してもらいたい。

* 大分では無料駐車場 + シャトルバス(往復 ¥100)で成功している。

(第3分科会)

幹線道路提案図



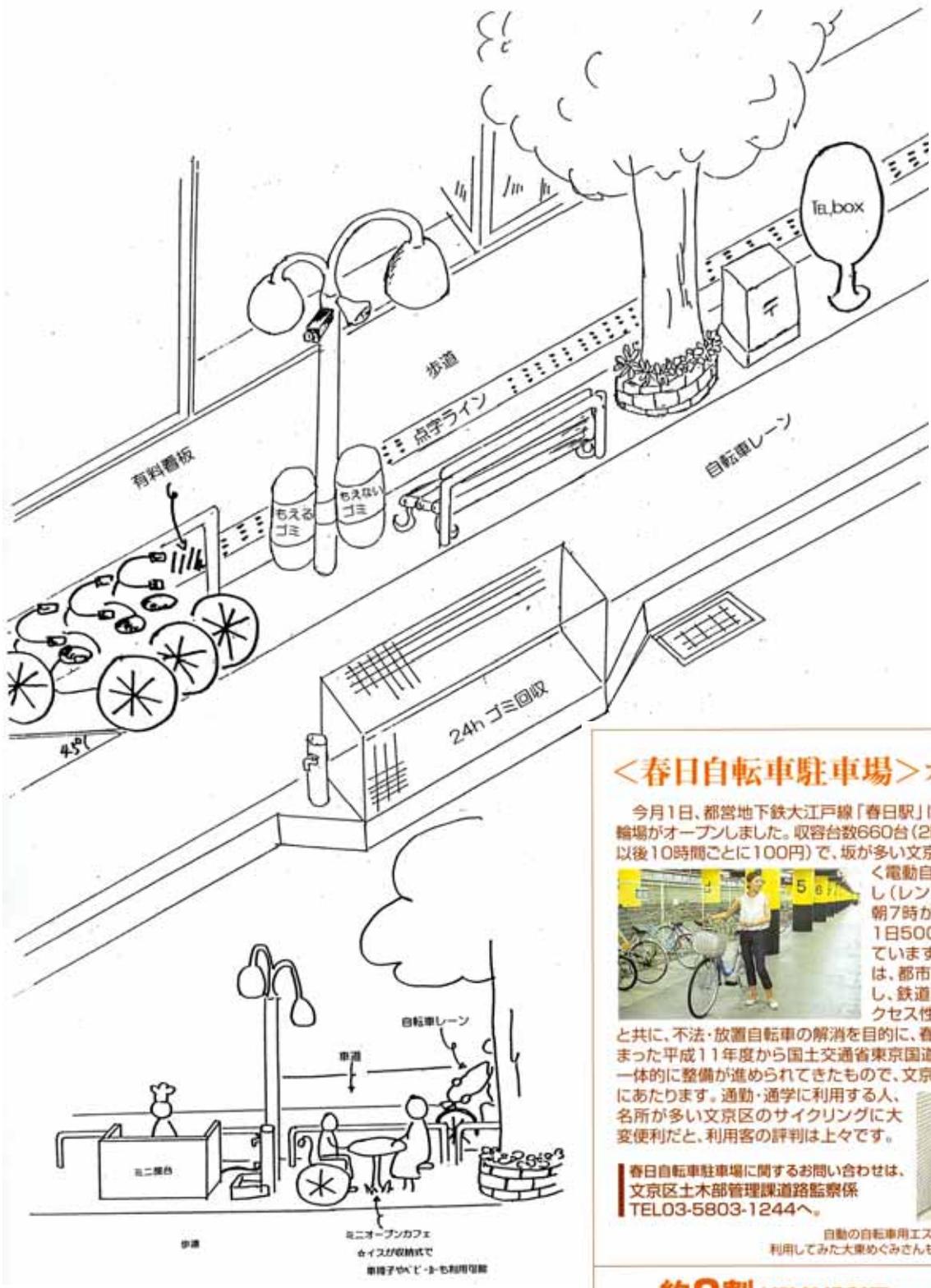
路上駐車撤廃又は、車道を1車線減らし、歩道拡幅。
 街路樹の間に必要な設置物を通行の妨げになるものを置かない。
 不法設置看板を無くし、有料広告スペースを設置。
 パーキングメーターをなくし一時停車場を設置。
 荷捌きや緊急車両停車駐輪場をランダムに設置し、不法駐輪を無くす。
 花壇を設置し、子どもや高齢者等、行政の監督の元、責任を持って管理してもらい、街づくりの参加と楽しさを意識してもらう。
 ベンチを置き、ゆとりを有料貸しスペースで露店をポストやボックスもこの空間に設置。
 歩道上に道案内ペイント。
 24hごみ集積コンテナ設置で時間外ゴミ出しに対応。
 歩道側から入れ、車道側から出す。威圧感の無いデザインを公募
 福祉重点地区にアーケード。
 ソーラーパネル設置で電力を賄う
 街燈にカメラ・通報システムを設置。
 防犯対策。
 歩道管理者を置き、清掃や指導をする

る

ユニバーサルデザイン（東京都ガイドライン）

以下に沿ったチェック項目を作成し、具体的検討をする。

- ・公平性の原則（だれにも公平に利用できること）
- ・柔軟性の原則（利用者に応じた使い方ができること）
- ・単純性と直感性の原則（使い方が簡単ですぐわかること）
- ・安全性の原則（使い方を間違えても重大な結果にならないこと）
- ・認知性の原則（必要な情報がすぐ理解できること）
- ・効率性の原則（無理な姿勢をとることなく、少ない力でも楽に使えること）
- ・快適性の原則（利用者に応じたアクセスのしやすさと十分な空間が確保されていること）



<春日自転車駐車場>オープン

今月1日、都営地下鉄大江戸線「春日駅」に隣接して、駐輪場がオープンしました。収容台数660台(2時間まで無料、以後10時間ごとに100円)で、坂が多い文京区にふさわしく



電動自転車の貸し出し(レンタサイクル/朝7時から夜8時まで1日500円)も行われています。この駐輪場は、都市内交通を緩和し、鉄道駅と道路のアクセス性を向上させると共に、不法・放置自転車の解消を目的に、春日駅建設が始まった平成11年度から国土交通省東京国道事務所により一体的に整備が進められてきたもので、文京区が管理運営にあたります。通勤・通学に利用する人、名所が多い文京区のサイクリングに大変便利だと、利用客の評判は上々です。

春日自転車駐車場に関するお問い合わせは、
文京区土木部管理課道路監察係
 TEL03-5803-1244へ。



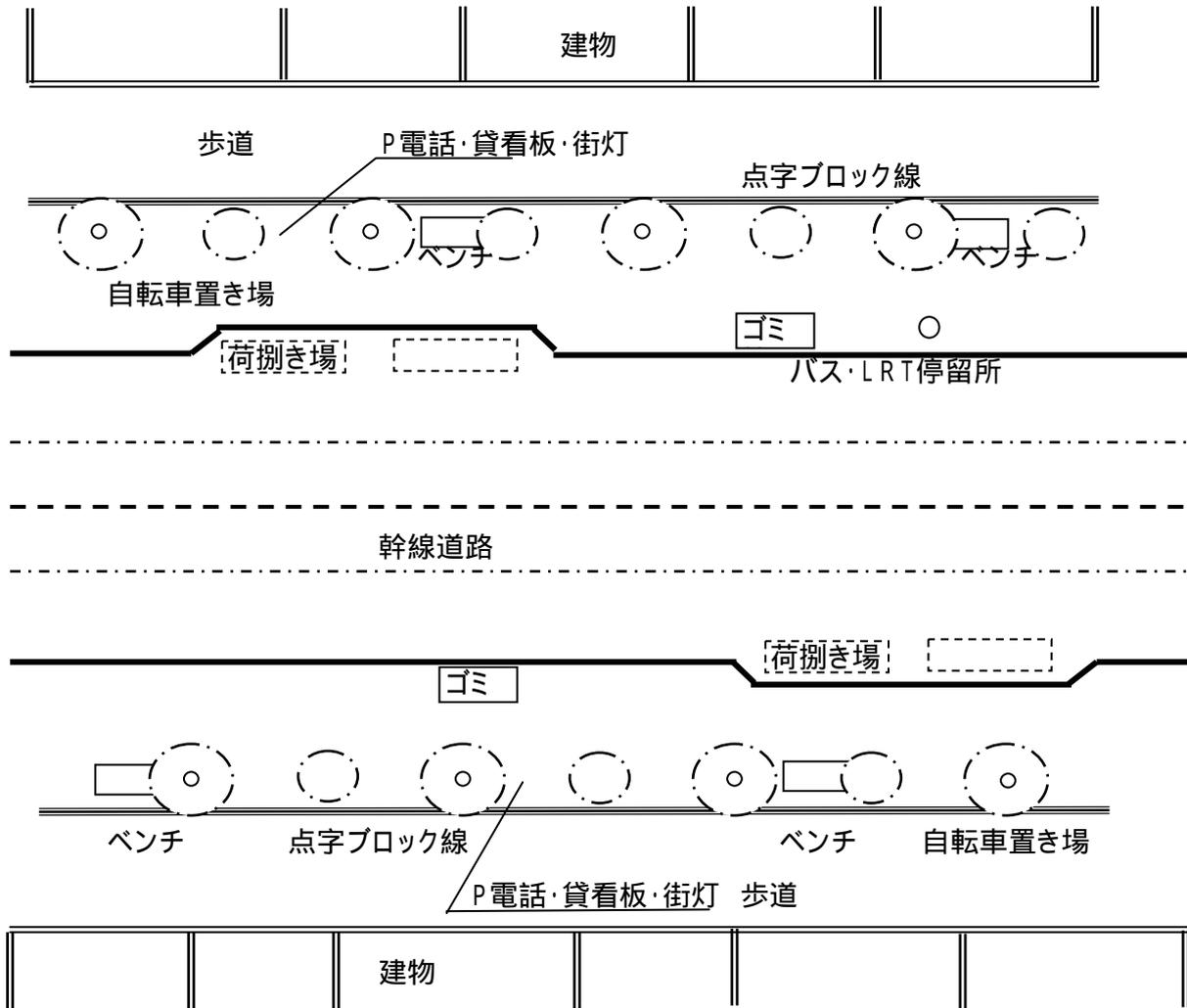
自動の自転車用エスカレーターもあり、利用してみた大層めくみさんも便利になっとく!

約8割が駐輪場利用 [東京都内の状況]

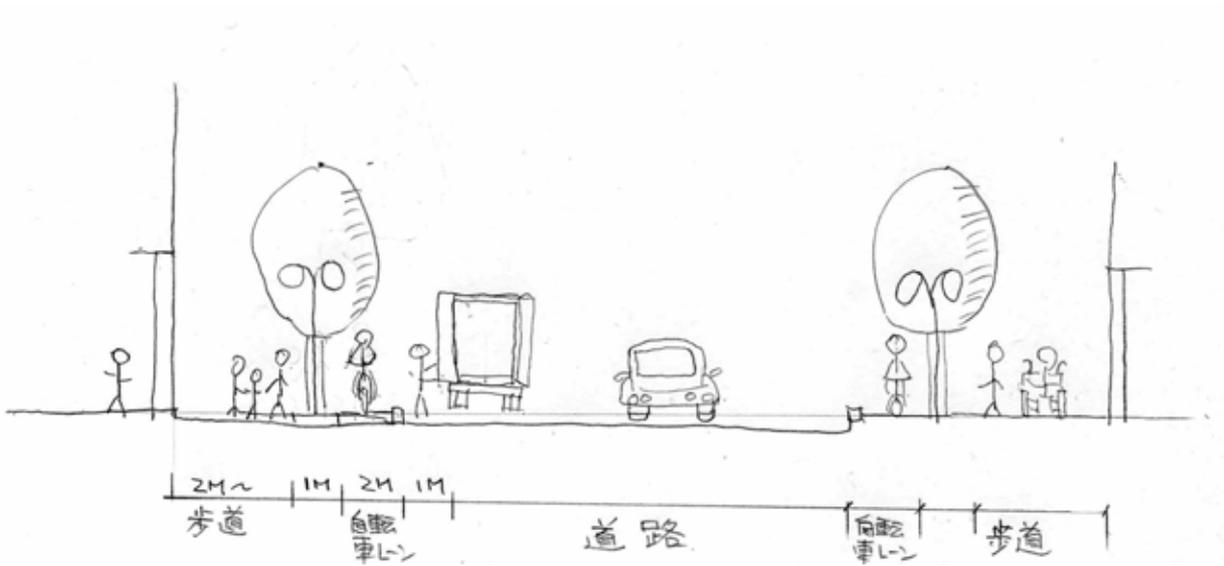
平成15年10月の調査(※)で、都内の駅周辺に乗り入れる自転車等は約72万7千台で、うち駐輪場の利用は約57万7千台(79.4%)、路上などに放置されていたのは、約15万台(20.6%)。駐輪場の新たな設置や自転車利用者のマナー向上などで、駐輪場利用者はここ数年増加しています。今後の放置自転車対策としては、駐輪場のさらなる設置や自転車利用者の駐輪場への誘導・適正利用の啓発活動が有効です。

※平成16年4月東京都生活文化局の報道発表資料より

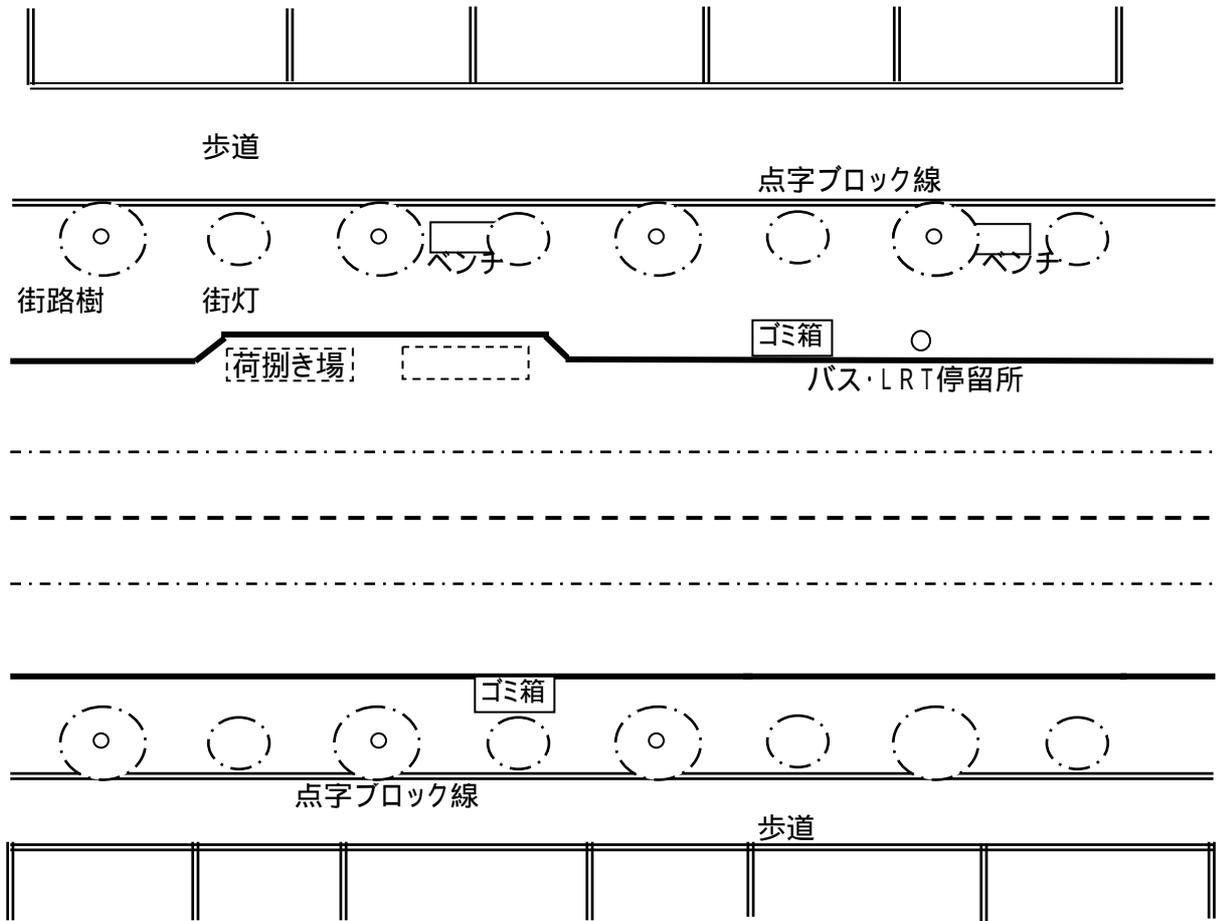
幹線道路(20M ~)1-ア



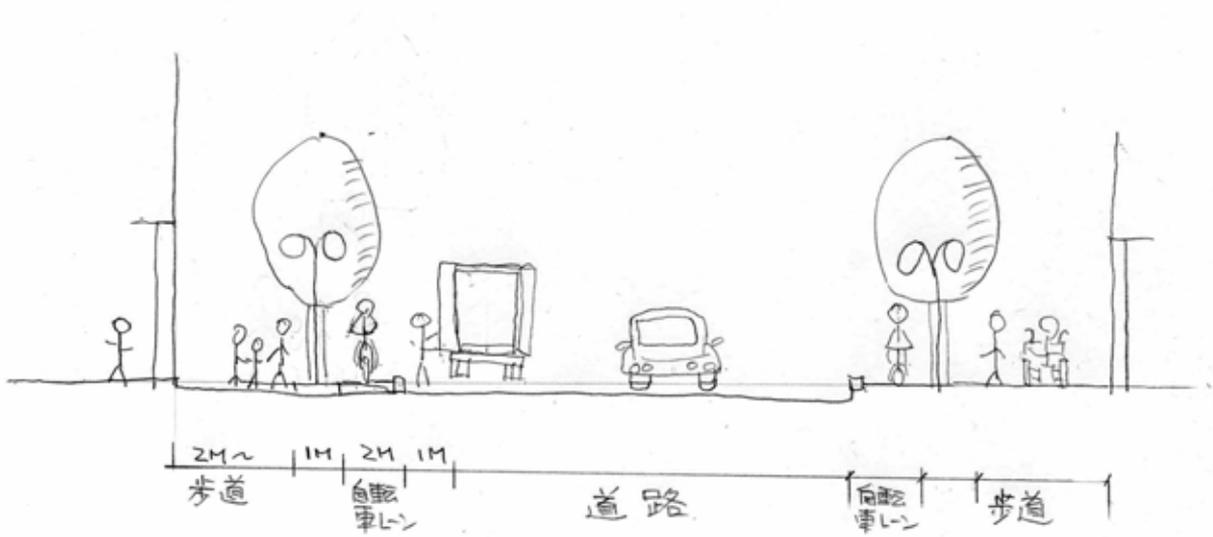
イメージラフスケッチ図



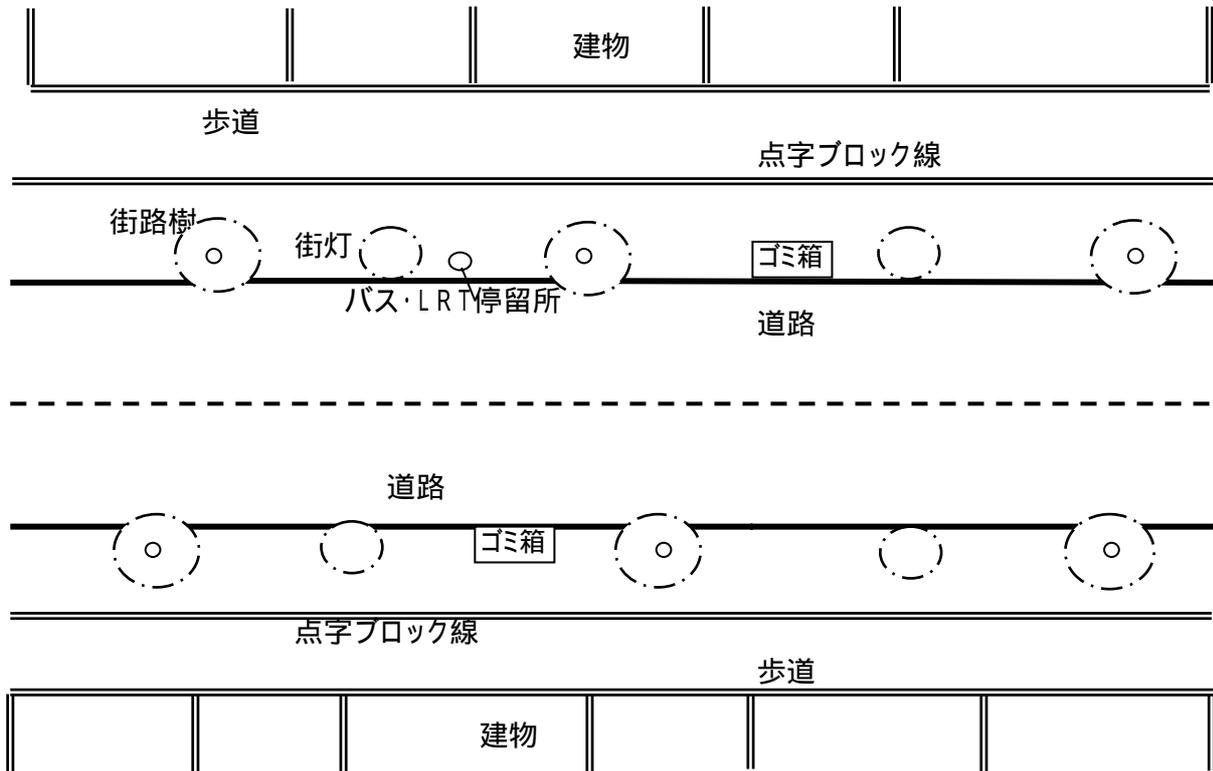
補助幹線道路(16M~20M)1-イ



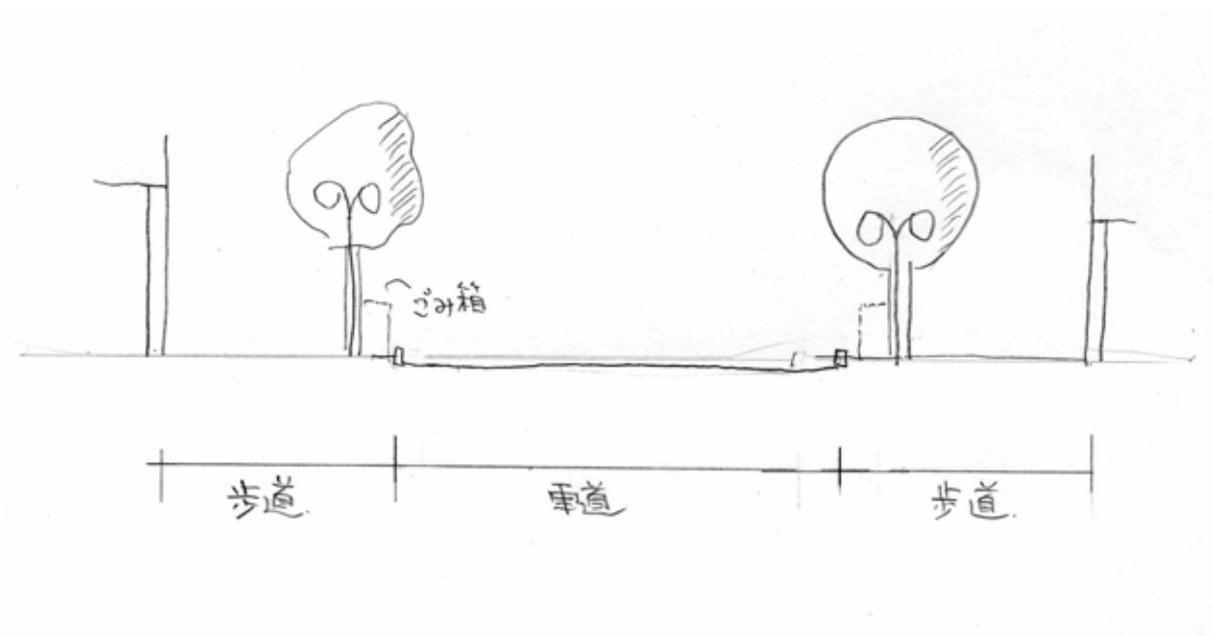
イメージラフスケッチ図



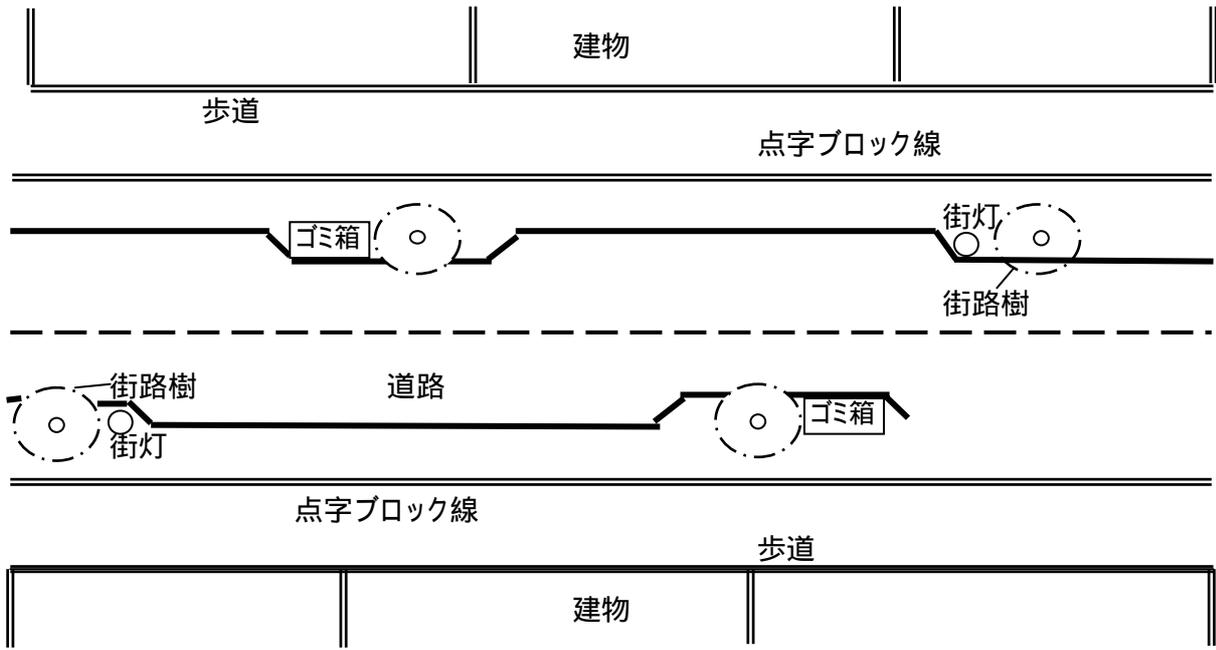
地区内主要道(8.5M~16M)1-ウ



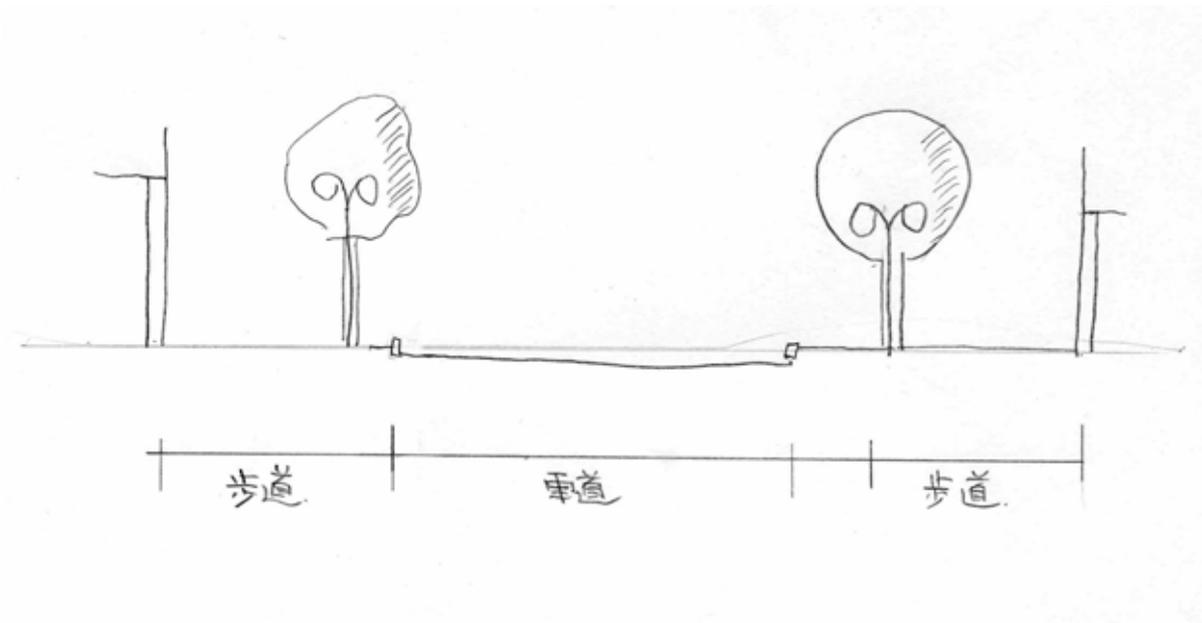
イメージラフスケッチ図



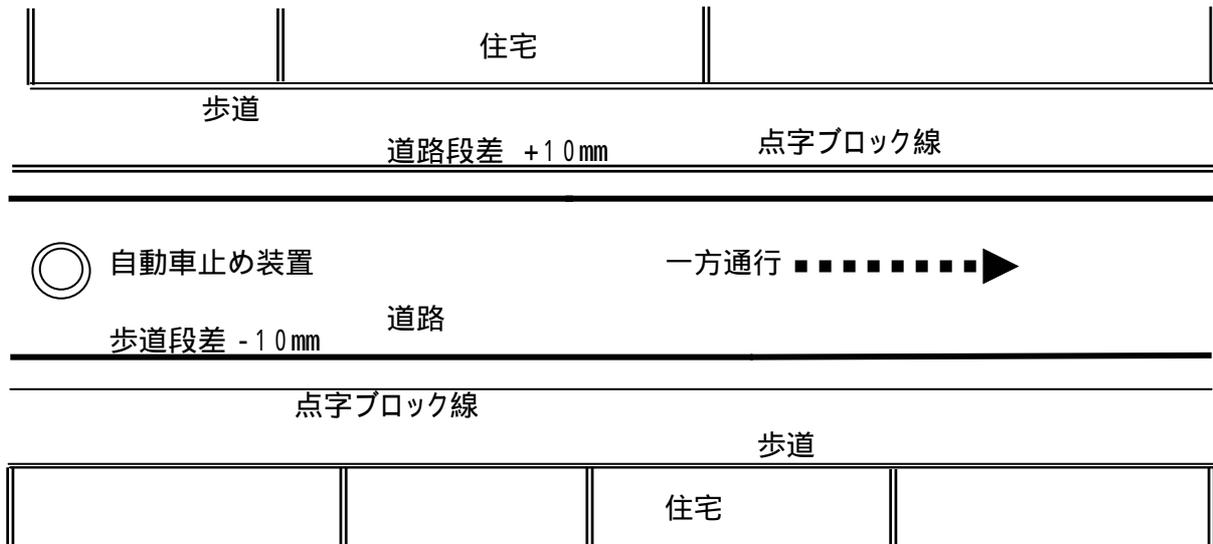
主要区画道路(6M~8.5M)1-工



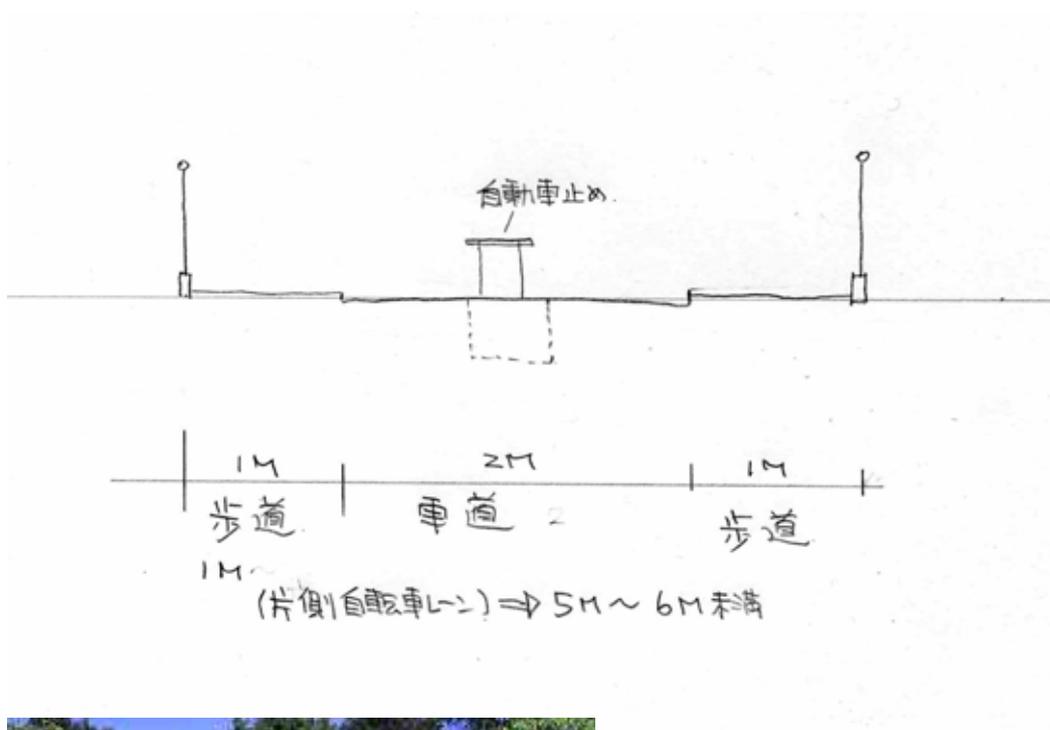
イメージラフスケッチ図



区画道路(4M~6M)1-オ

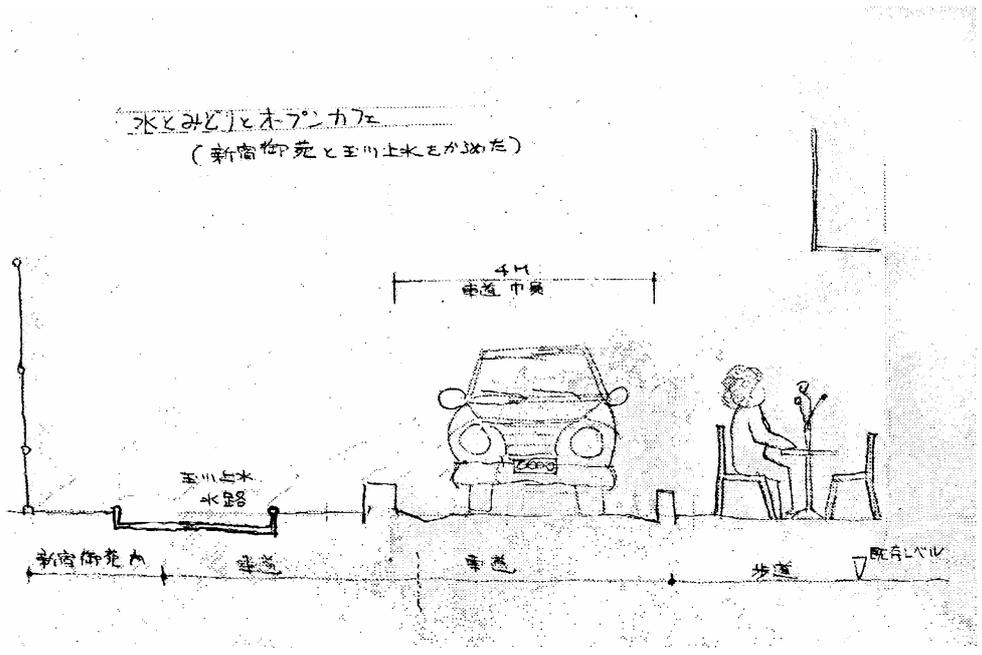


イメージラフスケッチ図

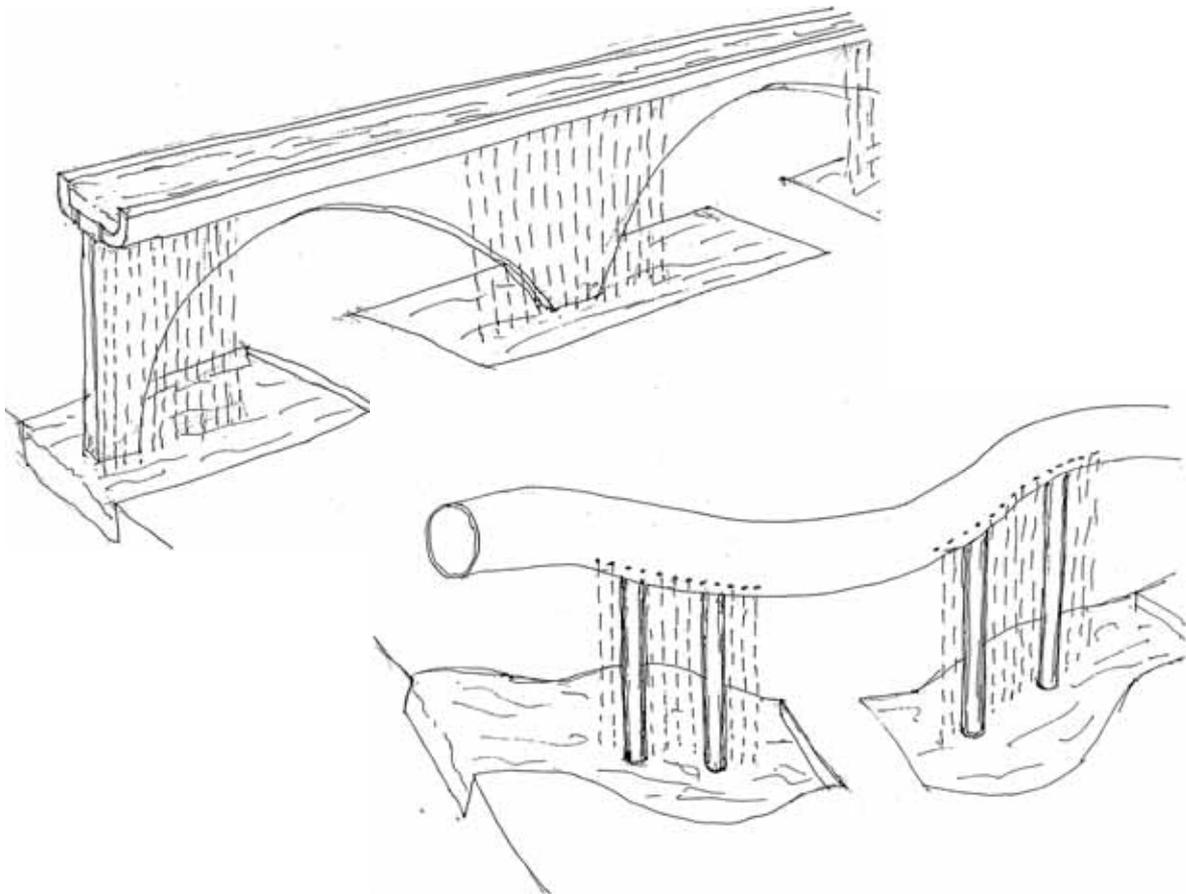


ロボットボラード

新宿御苑及び新宿通りのイメージラフスケッチ図 2 - ア



新宿御苑前通りと玉川上水とのイメージ



新宿通りに水のカーテン

7 ひとにやさしいのりものネットワーク

【将来のあるべき姿】

誰もが快適(安全・便利・楽しく・気持ちよく)に利用できる移動手段をつくり、「新宿に車で行くと不便。自転車か電車が便利。」というイメージ(パーク&ライドの発想)をキーワードに、便利な鉄道やバス、人にも環境にもやさしい路面電車(LRT)の復活などにより、歩く人を中心に自転車や電動車椅子が共存している社会が実現しています。

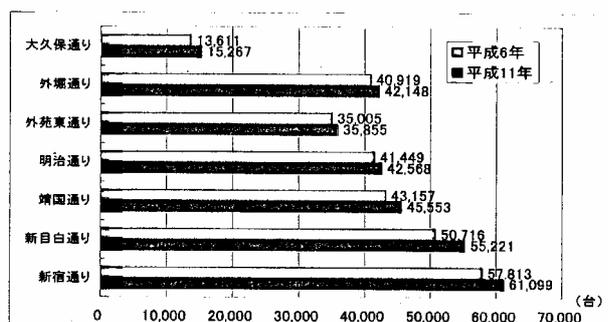
車中心社会から脱却するためには、それに代わる利用しやすい移動手段の検討が必要になります。自転車で目的地まで行ける安全な道や細かい駐輪場の整備が行われ、パーク&ライド、サイクル&ライド、バス&ライド、乗り継ぎ移動の便利さに応える取り組み等も進んでいます。また、乗り物での移動手段が充実することで、行動範囲が広がり、人と人との関りを生み出したり、公共マナーを自然に学習する機会も増えます。高齢者や障害をもつ人々を始めとして、外出を控えている人が積極的に外に出て安心してまちを楽しめる新宿が実現しています。

【現状と課題】

新宿区は、公共交通機関が非常に発達しています。しかし、駅から目的地までの移動は、意外と不便です。地下鉄は、エレベーターやエスカレータが整備されつつありますが、上下の移動に時間もかかり、高齢者等には不便な乗り物となっています。

地下鉄の整備に伴い、車窓を楽しめ、比較的バリアフリーな公共輸送機関であるバス路線は廃止や運行本数が削減されるなど利用しにくくなっています。かつて、新宿区にも多くあった路面電車は、交通渋滞を招くという理由でほとんど廃止されてしまい、現在、荒川線を残すのみとなっています。しかし、現実には、区内の交通量は増加の一途をたどり、交通渋滞も益々ひどくなっています。

過度な自動車利用の対策として駐車場と駅(停留所)の一体化による、自動車の乗り入れ制限や、自転車・LRT等を含めた公共交通の新たなシステムを検討し、目的による移動手段の使い分けを提案します。



(出典：平成6、11年度道路交通センサス)

新宿区内自動車通過交通量
(平日24時間)の推移

【取り組みの方向性】

1. 誰にも利用しやすい鉄道

ア ホーム・電車間の乗降

- ・ホームでの安全管理の徹底
 - 柵と、ホームと電車の間が開いている場合の対策
 - ワンマン化を想定して、車両側に自動プレートを取り付ける。
 - (車椅子、ベビーカー、間対策)

イ エレベーター等の設置基準

- ・目的の出入口を利用できるように設置
- ・電車運行の間は稼働させる
- ・入口の幅や大きさの基準を決める
 - 幅広なベビーカーや電動車椅子、緊急時の搬送を考慮
- ・目立つ場所に表示を分かり易く

ウ 車両

- ・ベビーカーや電動車椅子(シニアカーを含む)乗車可能な整備をする。
 - 混雑時における優先車両の設置等。

エ 開かずの踏み切り対策

- ・開かない時間の基準を決め、それを超える場合は鉄道会社が責任を持って対策を検討し実現する。
 - 高架や地下化が無理な場合、10分以上踏み切りが降りる場合、1分開ける(電車側を止める)

オ 駐輪場の設置義務化

- ・大江戸線春日駅のような駐輪場を基準に、鉄道利用者を十分に補えるスペースの駐輪場の設置義務を各駅に設ける

2. 路面電車(LRT)の復活

架線の無い地下集電システムのもの。後に蓄電式

「早稲田の杜」から「公園行き」

哲学堂公園 早稲田

新宿中央公園 高田馬場駅 早稲田

新宿御苑 神宮外苑 早稲田

新宿御苑 新宿通り 新宿駅東口・西口(地下東西通路開設時) 新宿中央公園

区内広報専用スペースを設け、各地域のイベント情報等を掲示する。

〈路面電車(LRT)の利点〉

- ・バス、自動車に比べ、クリーンエネルギー
- ・バスに比べ、輸送量が多い
- ・バスに比べ、路線確保によって輸送時間の確保がしやすい
- ・鉄道(地下鉄)に比べ建設コストが安い(約10分の1)
- ・鉄道(地下鉄)に比べバリアフリー乗降がしやすい
- ・車両を状況に合わせて増減可能
- ・自動車という「個」の手段から乗り換えることで人とのふれ合いが生まれる
- ・地域と地域との交流が生まれる
- ・自動車と電車の目的による使い分けができる
- ・環境を保護する
- ・自動車事故に比べて、事故が少ない
- ・クリーンエネルギーのためオープンカフェと共存できる。
- ・街の面での活性化が可能(トランジットモール)

企画車を走らせる～採算性への挑戦～

休日や日中に企画車を走らせて人を集める。

- ・アンパンマン号、アトム(ブラックジャック)号、お笑い号、カフェ号等
- ・区民と区民外の料金差をつける。
- ・声優により、車内マナーや区内企画告知をすることで、子どものマナー教育も行う。

実現性

現在、LRTの有効性が見直されており、全国的(29都市・地域)で路面電車(LRT)の検討が始まっている。



写真は路面電車展にて、架線レストラム
(フランス)

3. 利用しやすいバス

ア ルートの見直し

利用者が使いやすいバスとするために、始点や終点を含めたバス路線の検討や本数を増やすことを検討する。

イ コミュニティバス

(区民がスポーツと文化に触れやすく、なるべく乗り換えなしで行き、区内の交流を生む形)

哲学堂 コズミック 文化センター ハイジア(多文化交流拠点・区役所)
四ツ谷 文化センター コズミック 飯田橋

ウ 停留所の見直し

- ・乗り換えや利便性を検討し直す
- ・雨風をしのげる待合所

エ ダイヤの見直し

- ・深夜の小規模バスの検討(生活スタイルの多様性を考慮)
バス停にとらわれず、ルートは決めつつも、降車ボタンで降りる場所を指定できる
(乗合タクシーのようなイメージ)
* 路面電車の深夜運行でも。

オ 車両の見直し

- ・エコカーの導入
- ・コストに見合った容量のバスをルートや時間に合わせて使い分ける

カ 料金の見直し

4. 自転車・電動車椅子制度

* 目的地まで自転車・電動車イスを安全に利用できるシステムが必要

ア 自転車利用許可制度

- ・軽車両の道路交通法やマナー、技術を学んだ上で認定(更新制度にする)

イ 自転車税

- ・自転車登録の管理(区と警察のチーム形成)と無料駐輪場利用に充てる
- ・地域通貨(エコ通貨やボランティア通貨、アトム通貨等を一本化)の一部にする。

ウ 駐輪場の設置義務

- ・自転車許可制度の中に駐輪場証明(車庫証明のようなもの)を導入
- ・駅や店舗、ビルや学校、施設等は責任を持って駐輪場の確保をする(条例化)

エ 電動車椅子

現在、電動車椅子は2種類に分けられている。

ハンディキャップ用の補助器具としての電動車椅子(ジョイスティック)と高齢者向けのシニアカー(ハンドル)である。両方とも歩行者扱いであり、歩道走行である。

速度:歩行者の速さは3~3.5km/hだが、電動車椅子は6~10km/h(調整は可能)。

外国製やシニアカーは更にスピードが出せ、改造も比較的簡単である。

技術:電動車椅子は判定制度があるため、簡単な技術講習が行われる。シニアカー

は特に規定はなく、自由に購入可能なため、スクーター感覚で利用されることもある。

規定：幅や大きさ・重量等の規定はいまのところない。

鉄道：シニアカーについては、直角型エレベーターと車両の乗り入れが JR のみ認められていない。

要検討課題

歩道のバリアフリー化を目指す中で、特にシニアカーの利用が更に増加すると考えられる。歩行者のため、歩道走行のみとなる。

歩道の混雑時や 5km/h 以上の加速時は自転車レーンを利用可能とできるか
とっさの障害物回避技術や、操作技術の講習とともに、許可制度のようなものは必要ではないか シニアカー

ハードの態勢も必要だが、直角型 EV 等に対応できる形の改良や歩道での速度制限も必要ではないか

歩行可能な高齢者のシニアカー利用について、シニアカーを置いて移動する際のシニアカー置き場のようなものが必要か

自転車のように放置シニアカー発生か



シニアカー



電動車椅子 メーカーホームページより

5. 未利用地

ア バイク、駐輪場の協同管理

・小さな未利用地は、有料バイクや自転車置き場に利用

駐輪場を持たないアパートや店舗等へ貸し駐輪場(管理者は区又は商店)

(第3分科会)

8 知のネットワーク

【将来のあるべき姿】

私たち区民が心の豊かさを感じ、知を大切にする新宿区にしたいと考えています。新宿区民が心の豊かさと生活の豊かさを実感するために、情報(知ること)を使って、生活の質的向上をはかり、もう一段上の豊かさを追求したいと思います。知のネットワークは、区民の頭脳を結ぶ毛細血管であると同時に、産業・文化・観光の質的向上や、ホンモノの伝統の継承・発展を推進する動脈でもあります。

区民が社会生活を営んでいく中で、どうしても知らなくてはならない生活情報があります。これらの必要情報をいつでも自分のものにし、必要なときに取り出すことは不可能なことでしょうか。私たち第5分科会では、生活に密着し、区民の役に立つ情報をお届けしたいと熱心に話し合いました。

既存の区の特別出張所・地域センター、消費生活センターなど各種センター、図書館や学校施設などを結んで、現在の縦割りの情報から横断的ネットワークを構築し、連繫させ、高度化させ知のネットワークとしてパワーを与えていきます。

現在の種々雑多で、凄まじい情報の洪水から確かな情報を得る力(情報リテラシー)を区民がつけるにはどうしたらよいのでしょうか。情報は一部の人だけが使えるものであってはなりません。パソコンを持っていない人や、IT化になじめない高齢者や子ども達に、情報格差(デジタル・ディバイド)を生じさせないために、ペーパー(紙媒体)を使い印刷して提供するなど、誰でもが情報を得られやすい配慮が必要です。情報に対して区民が一律に平等であるべきです。

知のネットワークができると、具体的にはどう変わるのでしょうか。

このシステムが構築されると、情報の拠点にアクセスすることにより、新宿区を媒体として新宿区役所の広報活動が詳細にわかります。文化事業団体、各商店会、その他の様々な団体やグループの出来事やイベントなど区民や区外の人に参加しやすい形で広く知らせることができます。音楽や演劇など芸術関連の紹介や産業ビジネスのチャンスを招き、外部から「観光新宿」として来街者を集めることもできます。

昨今話題のビジネス支援として、経営学や財務関連書の整備、新製品開発から販路開拓など、起業セミナーや経営相談、資格試験や就職のための情報収集、貿易統計などデータベース資料からインターネットで直接アクセスできます。

「法律関係」や「医療・健康」の医学書や病院調べをしたり、日常の消費生活のなかで困ったことがあれば、「消費生活センター」に相談したり活用方法もわかります。

情報を抽出する際に、どの分野から取り出したらよいのか分からない時や、直接パソコンでアクセスできない人には、「情報コンシェルジェ」が代わりにご案内し、「情報探し」のお手伝いをしてくれます。困ったことや疑問に思うことがあれば「情報のかけこみ寺」として

区民の役に立つ情報センターをめざします。情報が新しい友達であり、先生であり、生涯教育の土台づくりになって、社会教育機関として不可欠の存在となっていくのではないのでしょうか。

【現状と課題】

新宿区は多様な顔を持ち、それぞれがそれぞれの部署から各種のお知らせやご案内など区民は情報の発信を受けています。しかし区民側は他地域の異なったグループの活動や、他業種の動向など横とのつながりがなく情報がまとまっていません。とても区民のニーズに应付しているとはいえません。これを新宿区を媒体とし、音楽や演劇などの芸術活動、伝統技能である古典芸能や地場産業である染色技術、日本に生活している外国人文化の状況など、情報を媒体として、お互いを知り助け合っていくことから活動は活発になっていきます。そのためには各グループを結びつける核となる拠点が必要になってきます。それが「情報の交差点」であり、「情報センター」になります。この情報の拠点ができることにより、情報の自由往来(収集・発信)が活発になり異質なものの出会いから、新しい価値観や活力も生まれ出てきます。新宿区立中央図書館がこの拠点づくりの核、まとめ役になるわけです。

新しい時代を迎えるこれからの図書館は、区民の知りたい要望に应付、即時に回答を与え、必要なデータを提供する頭脳を持つ館であることが望まれます。

新宿区立中央図書館の現状

図書館というと、読書を楽しむという色彩が強かった「趣味の館」の認識が強いと思います。公共図書館が新たにその多様なデータ量を駆使して、新しい息吹を与えられ、情報化によって新たな役割を求められています。今までの図書館から脱皮して、生活者に密着した「地域の情報交差点」として、再登場が促されています。

私たちの中央図書館も、更に区民に親しまれ役に立つ図書館に生まれ変わらなければなりません。

図書館のネットワークも区立の各地域図書館だけではなく、小・中・高校の図書館や専門学校・大学の図書館との連携も視野に入れて考えていきます。

この課題を達成するために、情報の発信基地となるセンター機能とシステムづくりの構築が必要になります。しかし、現在の中央図書館では、建物の構造上、IT化の設備基盤を敷設することは現状では難しいと聞いています。そのため現在貸出予約などの検索は出来ても、データベース検索用のパソコンは未設置で、アクセスも出来ない状態です。情報化を推進していく上で、基盤整備が難しい状況であるならば、根本的にこの問題について広く検討する必要があるかと思われます。

東京都の中でも文化発信の中心地であり、文化の先取りをしていると任じている新宿区が、10年後、20年後の展望を提言できない筈はありません。提言として提案するだけ

でなく、新宿区として、早期に取り組んでほしい重要な課題です。区民の生活に資するための基本となる「情報センター」の設置が必要と認められます。

【取り組みの方向性】

1. 「情報センター」は生活情報の多角化とヒューマンネットワークの構築

生活情報として「ビジネス支援」、「医療・健康支援」、「法律関係支援」、「消費生活支援」、「資格試験や就職のための情報収集」など、区民生活に直結した役に立つ情報を提供していきます。

新宿区役所・各特別出張所、地域センターや「BIZ新宿」、「ウイズ新宿」、「新宿消費生活センター」など、諸公共施設とネットワークし、情報の一本化を図ります。

「情報コンシェルジェ」や「情報かけこみ寺」を使って、情報さがしのお手伝いをし、区民の知識の幅を広げます。

2. 「情報センター」の早期実現のため委員会設置

区は情報センター実現のため企画立案し、積極的にシステム構築を推進すること。委員会は、現在持っている情報発信の状況を把握し、行政、区民、専門家を交え、新宿区に特化した、新宿区民のニーズに応える「情報センター」を構築しなければなりません。また、情報の内容については、幅広い区民からの意見を聞き、キメの細かい配慮が必要になります。

3. 図書館・情報センターに求められているもの

情報化が進み、図書館の重要性が見直され、文化と楽しみの発信基地としてその価値が再認識されると、図書館運営や、図書館職員の資質や専門性など期待されるものも大きくなっていきます。図書館の果たす役割りとして、信頼の置ける資料の選択や保管など、次世代に継承すべき文書館としての責任も担っております。来館者のニーズを聞き適確にその要望に応えるためには、広範な知識と経験が必要になります。

区民の文化の担い手として図書館職員への期待が集まっています。

4. 誰もが利用しやすい図書館であり、情報センターであること

図書館は多くの人気が軽に行かれる距離を前提として設置されています。新宿区内で未だ図書館が無い、図書館の空白地域の解消に努めなければなりません。

子どもがひとりで歩いて行かれる安全な場所、高齢者がバスなどを利用してでも行きやすい場所、多くの人気が軽に楽しめる場所として、まちの中心にあり区民が情報格差を生じさせない工夫も大切です。図書館職員は情報の探し方やパソコン検索の方法な

ど教えてください。

図書館は情報センターとして新しい視点から利用されていきますが、面白く魅力的で感動的な本や絵本も、本来の図書館機能として充実していかなければなりません。

図書館は、地域の人との交流と集会の場所であり、会話を楽しむ人間のふれあいの場所でなければなりません。地域の活性化のために今一番望まれているものではないでしょうか。

5. 安心な信頼における情報ツールとトラブル解決システム

消費者が安心して消費生活を営むためには信頼における情報が必要です。新宿消費生活センターは、現在、国・東京都・各企業より最新情報の収集・発信をする基地としての役割を持っています。また、消費者が情報を選択できるよう啓発したり、消費生活において被害を受けた時あっせんして解決する法的にも整った機能をもっています。しかし新宿区全体の情報ネットワークが構築されていないため、知らない区民が多い状況です。ネットワークの構築により生活に役立つ情報の発信・交流が盛んになります。

また、新宿消費生活センターには、新宿区消費者団体連絡会の拠点もありますから、行政と消費者団体の「協働」による消費生活関連イベントや商品調査情報・消費者ニーズを収集・発信するシステムの構築により、消費生活が豊かになり商業・産業の活性化もはかられます。

6. 新宿区立産業会館(BIZ)を観光、ビジネス支援、商店会、産業界の拠点として再構築

再構築としては、消費者や在勤者・行政・関係団体・学識経験者等を交えた、活性化会議を設置し情報交換をおこない発信します。また、ホストコンピューターを設置し、専門職員をおき、商工関連の情報を収集・発信し、ユビキタス情報発信システムとも連動します。

このことによりビジネス支援や観光案内・商店会関連であれば「こだわり大賞」を受賞したお店・伝統産業の紹介等の情報交流が盛んにおこなわれ、活性化のチャンスやサポートが得られます。

7. 区民がつくる「区民の、区民による、区民のためのメディア」を設立します

膨大な情報洪水のなかで、ホンモノ、ニセモノの情報選別をすることは現代社会に生活するうえでの大切な生活技術です。しかし区民の生活を向上するためには、それだけでは不十分で、一歩進めて、情報作成、情報伝達にも踏み込む必要があります。換言すれば、区民の立場から情報改革を推し進めます。区民は、自身のメディアを獲得することによって、私たちの理念や情報の編集・加工、発信・伝達を強力に実現できます。区

民メディアは、知のネットワーク構築を通して区民の諸提案を人々に知ってもらうだけでなく、今後の区民の必要不可欠の、先進的情報装置として育てて行きたいと思います。それらは、良質で、真に必要な情報のみをたゆみなく発信します。また、インターネットの普及と技術の向上により、インターネットテレビ局の設立も夢ではなくなりました。

区民、大学、行政、企業一体となった新しい区民メディアの創設には、だれもが参加して意見をいうことが出来、専門家と同等の立場で区民が関われるNPOなどの組織がのぞまれます。メディアとしては、新聞、インターネットテレビ、FMラジオ、メールマガジン、ホームページ等を想定していますが、同時に区民放送記者、区民編集者、区民アートディレクターなどメディア人を育てる「区民メディア学校」も設立し、大学や専門学校の研究とは違う「区民メディアのありかた」を深く研究し実践します。

(第5分科会)